福岡市埋蔵文化財調査報告書第910集

元岡・桑原遺跡群7

――一般県道桜井太郎丸線拡幅に伴う 発掘調査報告書――

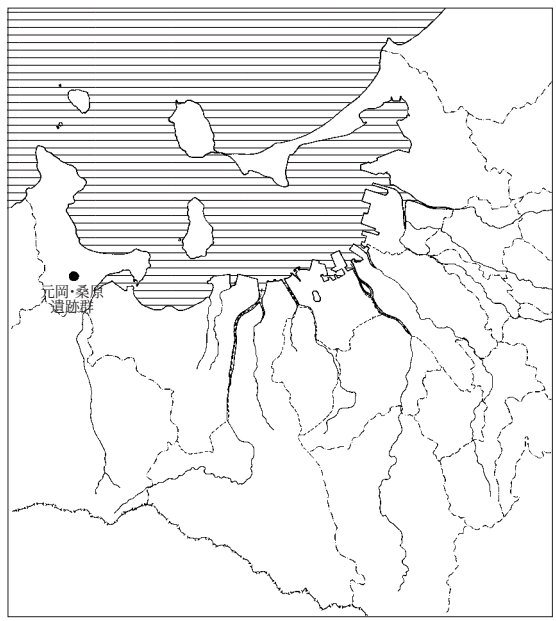
2006

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第910集

元岡・桑原遺跡群 7

―一般県道桜井太郎丸線拡幅に伴う発掘調査報告書―



遺跡略号　MOT-21
調査番号　0002

2006

福岡市教育委員会

元岡・桑原古墳群全景（南から）

上　21次調査2区全景（東から）
右手奥の調査区は製鉄遺構を検出した第12次・15次調査区。左上には可也山が見える。

中左　石ヶ元2号石室（南西から）
大型の石室を有し、奥壁側に屍床を設けている。

中右　石ヶ元10号石室（北から）

下　石ヶ元3号石室（南西から）
石室壁体の石材に玄武岩を使用するものは本古墳群の中では3号墳のみである。

序

福岡市は、アジア大陸に近いという地理的条件から、日本列島における大陸文化導入の門戸としての長い歴史と、その遺産である有形・無形の文化財を多数有しています。本市では、このような地理的・歴史的に関係の深いこれら地域との関係を重視し、「アジアの交流拠点都市」を目指した学術・文化交流を進めているところです。

明治以降、本市発展の礎の一つともなった九州大学では、現在、箱崎・六本松・粕屋町の各地区に分散しているキャンパスを統合移転し、新たな研究と教育の拠点を創造するために、福岡市西区元岡・桑原地区および、隣接する前原市、志摩町にまたがる新キャンパス建設事業を進めています。

この統合移転事業に伴い、周辺地域のまちづくりも本市の課題の一つとなっております。その一環として、ＪＲ筑肥線の九大学研都市駅から九州大学伊都キャンパスを結ぶ一般県道桜井太郎丸線の整備は、九州大学の新たなる発展と周辺地区の活性化を考える上で、欠くことのできない主要幹線道路となります。

しかしながら、これら開発の一方で姿を消していく文化財も多数あることは事実であり、それらの記録保存を目的とした発掘調査を本市でも行っております。本書は、この一般県道桜井太郎丸線建設に伴い発掘調査を実施した、元岡・桑原遺跡群21次調査と18次調査の一部の成果を報告するものであります。桑原地区では古墳時代後期の円墳群が多数発見されておりますが、今回の調査でもその一部を確認し、馬具や装身具など貴重な発見がありました。今後、本書が文化財への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として内外で活用していただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査から本書の作成にいたるまで、多大なご協力をいただきました福岡市土木局をはじめ、元岡・桑原地区の皆様等関係各位に厚く御礼申し上げます。

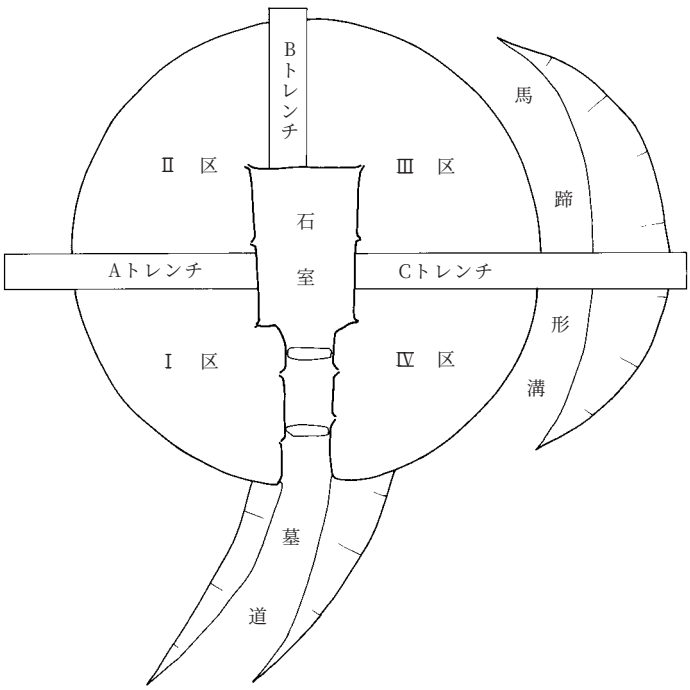
平成18年3月31日

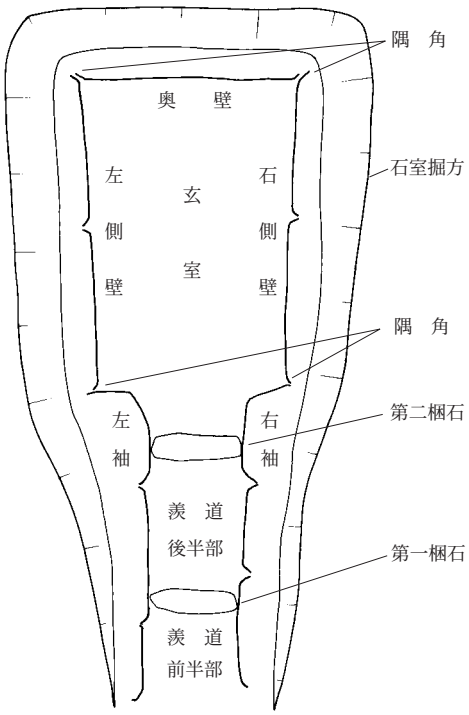
福岡市教育委員会

教育長　植木　とみ子

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が一般県道桜井太郎丸線の拡幅工事に伴い福岡市西区大字桑原地内で発掘調査を実施した元岡・桑原遺跡群第18次調査の一部と第21次調査の報告書である。
2．調査記録の作成および整理分担は、次のとおりである。
遺構実測・・・・・・・小林義彦、吉留秀敏、松浦一之介、小杉山大輔（現石岡市教育委員会）
遺物実測・・・・・・・松浦一之介、谷直子（九州大学大学院）
遺構写真撮影・・・・・小林義彦、松浦一之介
遺物復元・・・・・・・木下久美子、田中由紀、宮崎由美子、長浦芙美子
金属製品保存処理・・・比佐陽一郎、片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）
製　　図・・・・・・・松浦一之介、木下久美子
写真現像焼付・・・・・㈲ダイドーカメラ
本文執筆・・・・・・・松浦一之介
3．本書で使用した方位は磁北であり、座標は国土調査法第Ⅱ系に拠る。また、標高は東京湾平均海面高度（T.P.）に拠る。
4．本書で使用した地図は国土地理院発行の福岡西部・福岡西南部・宮浦・前原および福岡市発行の福岡市都市計画図を原図としている。
5．本書で使用した遺構の略号は、奈良文化財研究所の用例である。
6．本書に関わる遺物および記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。
7．本書の編集は、松浦一之介が行った。
8．本書で使用する墳丘に設定したトレンチの名称とそれに区画される墳丘各区の番号、古墳および石室各部位等の呼称は、下図に示した通りである。





本 文 目 次

第１章　はじめに……1
１．調査に至る経緯……1
２．調査の組織……1
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境……2
第３章　調査の記録……5
１．調査の概要……5
１区の調査……6
１．検出遺構……6
２．出土遺物……6
２区の調査……9
１．調査の概要……9
２．石ヶ元1号墳……9
（１）位置と現況……9
（２）墳　丘……9
（３）内部主体……9
（４）出土遺物……13
３．石ヶ元２号墳……19
（１）位置と現況……19
（２）墳　丘……19
（３）内部主体……24
（４）出土遺物……28
４．石ヶ元3号墳……30
（１）位置と現況……30
（２）墳　丘……31
（３）内部主体……32
（４）出土遺物……34
５．石ヶ元10号墳……36
（１）位置と現況……36
（２）墳　丘……36
（３）内部主体……36
６．土坑墓……40
（１）SR－01……40
（２）SR－017……40
７．焼土坑……40
（１）SK－004……40
（２）SK－005……40

（３）SK－015……40
３区の調査……41
１．調査の概要……41
２．桑原古墳群Ａ－１号墳……41
（１）位置と現況……41
（２）墳　丘……41
（３）内部主体……43
（４）出土遺物……43
第４章　小　結……48

図 版 目 次

巻頭図版１
巻頭図版２
図１　糸島半島の遺跡群（縮尺1/100,000）……2
図２　元岡・桑原遺跡群調査区位置図（縮尺1/20,000）……3
図３　調査区位置図（縮尺1/1,000）……5
１　区
図４　１区遺構配置および調査区北壁土層断面図（縮尺1/400、1/60）……7
図５　調査区北壁土層（南から）……7
図６　１区全景（南から）……7
図７　１区出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4）……8
２　区
図８　２区調査区全景（東から）……10
図９　２区全体図（縮尺1/400）……10
図10　石ヶ元１号墳現況測量図および墳丘遺存状況図（縮尺1/200）……11
図11　石ヶ元１号墳全景（南から）……12
図12　石ヶ元1号墳墳丘断面（南から）……12
図13　石ヶ元１号墳墳丘断面図（縮尺1/60）……12
図14　石ヶ元1号墳石室実測図および遺物出土状況図（縮尺1/40、1/30）……14
図15　石ヶ元1号墳石室左側壁（東から）……15
図16　石ヶ元1号墳石室全景（東から）……15
図17　石ヶ元1号墳石室基底面の状況（東から）……15

図18　石ヶ元1号墳出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）……16
図19　石ヶ元1号墳出土装身具実測図（縮尺1/2）……17
図20　石ヶ元1号墳須恵器出土状況（東から）……17
図21　石ヶ元1号墳鉄鏃等出土状況（東から）……17
図22　石ヶ元1号墳花形杏葉出土状況（東から）……17
図23　石ヶ元1号墳勾玉、棗玉出土状況（東から）……17
図24　石ヶ元2号墳全景（南東から）……19
図25　石ヶ元2号墳墳丘測量図、墳丘遺存状況図および地山整形図（縮尺1/200）……20
図26　石ヶ元2号墳墳丘遺存状況（北西から）……21
図27　石ヶ元2号墳墳丘断面（北西から）……21
図28　石ヶ元2号墳地山整形（北西から）……21
図29　石ヶ元2号墳墳丘断面図（縮尺1/60）……22
図30　石ヶ元2号墳外護列石と墳丘土層（北から）……23
図31　石ヶ元2号墳外護列石検出状況（北から）……23
図32　石ヶ元2号墳石室実測図（縮尺1/40）……25
図33　石ヶ元2号墳石室第１面（北から）……26
図34　石ヶ元2号墳石室基底面の状況（北から）……26
図35　石ヶ元２号墳石室第1面および石室基底面の状況（縮尺1/40）……26
図36　石ヶ元2号墳石室奥壁（北から）……27
図37　石ヶ元2号墳石室屍床部（北から）……27
図38　石ヶ元2号墳羨道左側壁（西から）……27
図39　石ヶ元2号墳玄室左側壁（西から）……27
図40　石ヶ元2号墳石室全景（南西から）……27
図41　石ヶ元2号墳玄室右側壁（北東から）……27
図42　石ヶ元2号墳羨道右側壁（北から）……27
図43　石ヶ元2号墳閉塞施設土層（北から）、および閉塞石検出状況（南西、南東から）……28
図44　石ヶ元2号墳閉塞施設実測図（縮尺1/40）……28
図45　石ヶ元2号墳出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）……29
図46　石ヶ元３号墳墳丘測量図および墳丘遺存状況図（縮尺1/200）……30
図47　石ヶ元3号墳全景（南東から）……30
図48　石ヶ元3号墳墳丘断面図（縮尺1/60）……31
図49　石ヶ元3号墳墳丘断面（南東から）……31
図50　石ヶ元3号墳石室実測図（縮尺1/40）……32
図51　石ヶ元3号墳石室全景（南西から）……33
図52　石ヶ元3号墳石室左側壁（北から）……33
図53　石ヶ元3号墳石室遺物出土状況（北西から）……33
図54　石ヶ元3号墳閉塞石（北西から）……33
図55　石ヶ元3号墳石室基底面の状況（北西から）……33
図56　石ヶ元3号墳石室遺物出土状況および出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/2）……35
図57　その他の遺構、遺物出土状況および出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4、1/2）……35

図58　ＳＯ－010石室床面（東から）……38
図59　ＳＯ－010石室および掘方（南から）……38
図60　ＳＯ－010石室北小口（南から）……38
図61　ＳＯ－010石室南小口（北から）……38
図62　ＳＯ－010石室西側壁（東から）……38
図63　ＳＯ－010石室東側壁（西から）……38
図64　ＳＸ－016土坑墓全景（南西から）……38
図65　ＳＸ－016土坑墓土層断面（南西から）……38
図66　ＳＸ－017土坑墓全景（北東から）……39
図67　ＳＸ－017土坑墓遺物出土状況（東から）……39
図68　ＳＫ－004焼土坑全景（北東から）……39
図69　ＳＫ－004焼土坑土層断面（南東から）……39
図70　ＳＫ－005焼土坑全景（東から）……39
図71　ＳＫ－005焼土坑土層断面（東から）……39
図72　ＳＫ－015焼土坑全景（北東から）……39
図73　ＳＫ－015焼土坑土層断面（北東から）……39
３　区
図74　３区全体図（縮尺1/400）……41
図75　桑原Ａ－1号墳墳丘測量図、墳丘遺存状況図および墳丘断面図（縮尺1/200、1/60）……42
図76　桑原Ａ－1号墳石室実測図（縮尺1/40）……44
図77　桑原Ａ－1号墳全景（北から）……45
図78　桑原Ａ－1号墳石室全景（南西から）……45
図79　Ａ－1号墳石室第１面（北東から）……45
図80　Ａ－1号墳石室第２面（北東から）……45
図81　Ａ－1号墳石室第３面（北東から）……45
図82　桑原Ａ－1号墳石室第１面断面（北西から）……45
図83　桑原Ａ－1号墳石室第３面と右側壁（北西から）……45
図84　桑原Ａ－1号墳石室鉄鏃出土状況（北西から）……45
図85　桑原Ａ－1号墳石室刀子、耳環出土状況（北から）……45
図86　桑原Ａ－1号墳出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）……46
図87　その他の出土遺物実測図（縮尺1/4）……47

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

平成11年度、福岡市土木局道路建設部西部建設第２課より、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対し、福岡市西区地内における一般県道桜井太郎丸線道路改良事業について、埋蔵文化財の有無に関する照会があった。これを受け埋蔵文化財課では、同申請地のうち桑原地区について、周知の埋蔵文化財包蔵地である元岡・桑原遺跡群（桑原石ヶ元古墳群など）が存在することから、設計変更を含めた現地での保存を協議した。しかしながら、桜井太郎丸線の拡幅は、九州大学統合移転やそれに伴う周辺地域の基盤整備にとって不可欠の事業であり、設計変更は不可能と判断された。これにより同地区での遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための発掘調査を実施することになった。

同申請地のうち、調査区以外の桑原地区および元岡地区については、平成14年10月、平成15年1月、平成16年5月の２ヵ年度にわたって試掘調査を実施し、遺構の存在が確認されなかったので、慎重工事としている。

調査区は３区にわかれ、このうち第１、2区は第21次調査に、第3区は第18次調査として実施している。第21次調査は、平成12年4月4日着手し、同年10月20日に終了した。第18次調査３区は、平成12年4月4日着手し、同年10月20日に終了した。また整理報告業務は、平成17年度に行った。なお、調査段階では桜井太郎丸線より東側の調査区について18次調査地点３区として発掘調査を行ったが、一般県道桜井太郎丸線拡幅に伴う発掘調査区は、全て第21次調査として報告するものである。

２　調査の組織

調査委託	福岡市土木局道路建設部西部建設第２課			
調査主体	福岡市教育委員会文化財部大規模事業等担当			
	教　育　長	植木　とみ子（現任）	西　憲一郎	生田　征生（前任）
	文化財部長	山﨑　純男（現任）	柳田　純孝	堺　徹（前任）
調査担当	大規模事業等担当			
	課　　長	力武　卓治（現任）	山﨑　純男	二宮　忠司（前任）
	主　　査	米倉　秀紀（現任）	池崎　譲二	松村　道博
		濱石　哲也（前任）		
	担　　当	松浦　一之介（現埋蔵文化財課）		
庶務担当	文化財整備課			
	課　　長	榎本　芳治（現任）	上村　忠明	平原　豪（前任）
	管理係長	栗須　ひろ子（現任）	井上　和光	市坪　敏郎（前任）
	管　理　係	鳥越　由紀子（現任）	中岳　圭（前任）	

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで、福岡市土木局をはじめ、地域住民等関係各位には多大なご協力とご理解をいただいた。記して謝意を表する次第である。

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

元岡・桑原遺跡群は、福岡県西部の玄界灘に突き出た糸島半島東部に位置する旧石器時　代から近世にいたる複合遺跡である。それまで元岡池ノ浦古墳や、元岡瓜尾貝塚など数ヶ所の遺跡しか知られていなかったが、九州大学統合移転事業に伴って福岡市教育委員会が踏査や試掘調査を行い、

図１　糸島半島の遺跡群（縮尺1/100,000）

1	元岡・桑原遺跡群	18	権現古墳	35	古野古墳群	52	柏木古墳群
2	桑原石ヶ元古墳群	19	稲葉１号墳	36	岩野古墳群	53	東浦古墳群
3	桑原古墳群	20	稲葉２号墳	37	浜口古墳群	54	登浦古墳群
4	元岡古墳群	21	開１号墳	38	久保地古墳群	55	中ノ浦古墳群
5	桑原錦田古墳群	22	四反田古墳群	39	吹切遺跡	56	小田古墳群
6	元岡塩除古墳	23	鰐口古墳群	40	向畑古墳群	57	大原古墳群
7	桑原経塚古墳	24	荒牟田古墳群	41	久米遺跡	58	大原D遺跡
8	桑原金屎古墳	25	相川古墳群	42	後田古墳群	59	大原A遺跡
9	元岡石ヶ原古墳	26	林古墳群	43	田附古墳群	60	大原B遺跡
10	元岡池ノ浦古墳	27	塊掛古墳群	44	矢田古墳群	61	呑山遺跡
11	元岡E－1号墳	28	三十六古墳群	45	釣波古墳群	62	長浜貝塚
12	元岡I－1号墳	29	上大戸古墳戸群	46	壁田古墳群	63	登志山誓願寺
13	元岡峰古墳	30	畑山古墳群	47	大才山古墳群	64	今津貝塚
14	泊大塚古墳	31	八熊遺跡	48	早稲見ヶ浦古墳群	65	今津古墳群
15	御道具山古墳	32	御床松原遺跡	49	押方古墳群	66	今津海底遺跡
16	泊城崎古墳	33	新町遺跡	50	洞古墳群	67	柑子岳城址
17	泊大日古墳	34	北口古墳群	51	谷古墳群	68	今山遺跡

図２　元岡・桑原遺跡群と周辺の遺跡群（縮尺1/20,000）

数多くの遺跡が発見された。

平成18年3月現在、元岡・桑原遺跡群では、九州大学統合移転事業をはじめとした各種開発事業に先立って、48次にも及ぶ発掘調査が実施されている。遺跡の内容は前方後円墳７基や円墳70基などから構成される古墳群、縄文時代から古代にかけての集落址、律令時代の官衙関連遺構、鉄生産に関する遺構、中世の山城など多岐にわたっている。なかでも古代の鉄生産に関わる遺構群や、その営繕に関係する官衙関連遺跡の発掘調査は、多くの注目を集め、そのうちの数地点は九州大学により現地保存されることになった。また、周辺に展開する古墳群の調査では、被葬者が鉄生産や鍛冶に大きく関与していたと推定されるものも発見され、この地域におけるそれらの起源や歴史的背景を考察する上で重要な発見が相次いだ。

元岡・桑原遺跡群が立地する糸島半島は、古代国郡制下での筑前國志麻郡に相当する。和名抄によれば、郡内には登志（とし）・川邊（かわべ）・韓良（から）・明敷（あかしき）・久米（くめ）・加夜（かや）・志麻（しま）・鶏永（けえ）の７郷が置かれていたことが記述されている。東大寺正倉院文書には、大宝２年の戸籍「筑前國志麻郡川邊里」が現存しており、その郡司として大領肥君猪手の名が知られている。各郷の比定地については諸説があり、現在のところまとまった定説はないが、川邊郷については、現在の志摩町馬場付近とする説もある。

糸島半島は現在の行政区では、福岡市西区・前原市・糸島郡志摩町にまたがっており、大半が山岳やそこから派生する小丘陵で占められ、平野部が非常に限られている。その内、志摩町の初川流域には、古代条里が推定されており、上述した郡家の推定地でもある。かつては今津湾と加布里湾が大きく湾入しており、文字通り島嶼状を呈していたものと考えられる。また北側は、断崖が切り立つ険しい海岸線が多い。

糸島半島は、福岡都心から約15km西に離れており、これまでほとんど開発が行われてこなかったため、考古学的調査が実施されることが非常に少なかった。元岡・桑原遺跡群内の古墳群は、その大半が統合移転前の踏査によって発見されたものであり、よって半島内には未発見の古墳群が多く存在することが予想される。また、近世には糸島水道の干拓が行われ、戦後半島内の低丘陵は果樹園として開墾されたものが多いことなど、古墳群の多くが失われたものと推定される。

現在知られている古墳群を中心とした糸島半島内の遺跡分布は、図１に示した通りである。半島内最大の可耕地を有する初川下流域には、前期古墳の稲葉１・2号墳、権現古墳が、また中流域には半島内最大の前方後円墳である井田原開古墳（90m級）が存在する。円墳群としては大字初、小金丸、師吉などの初川両岸に三十六古墳群、畑山古墳群、上大戸古墳群、塊掛古墳群、四反田古墳群など約60基が分布している。

糸島半島東南部に位置する元岡・桑原遺跡群内の古墳群は、その多くで発掘調査が実施されてきた。前期の古墳としては金屎古墳や元岡Ｅ－1号墳などの前方後円墳や、元岡Ｅ－3号墳などの円墳があり数は少ない。中期古墳には、元岡池ノ浦や、塩除古墳などの前方後円墳があるほか、経塚古墳といった大型円墳がある。また桑原石ヶ元古墳群のうち30～36号墳は小規模な円墳群である。後期には、古墳の数が増大し、桑原石ヶ元古墳群元岡古墳群N群・O群・B群、桑原古墳群A群などで調査が実施された。大半は丘陵の削平や石室石材の抜き取りなどによって大きく破壊されており、墳丘規模や内部主体の構造が不明なものもある。しかしながら、遺存状況の良好な古墳では鉄製鍛冶工具や金銅装環頭太刀、多数の馬具を副葬するものも確認され、鉄生産や鍛冶に関与する有力者層が存在していたことがうかがえる。また陶質土器や、金製耳環など朝鮮半島系の遺物もすくなからず出土している。

後期古墳の経営期間は、その多くが7世紀代に終了したと推定されるが、石ヶ元古墳群や、元岡古墳群N群などにおいては8世紀代になっても墓前祭祀や追葬が継続されたものも確認されている。古墳群の周辺には、鉄生産に関連する官衙関連遺構や集落址が調査されており、これら下級官人層が律令期の古墳群の経営に関係していたものと推測される。

律令期の官衙関連遺構や鉄生産に関わる遺跡の調査としては、第7次、12次、18次、20次地点などがある。権や帯金具、印などの官衙的性格を帯びる遺物に加え、木簡や墨書土器などの文字資料も多数出土している。

中世の遺構としては、第４次調査地点など確認される遺構が非常に少ない。第21次1区では、龍泉窯系青磁などの輸入陶磁器が出土しているが、当該時期の明確な遺構は検出されなかった。元岡・桑原両集落内には、中世以降に創建された寺社が少なからずあり、中世集落が現集落と重なっている可能性も考えられる。

遺跡群の東側に位置する水崎城はその西側部分が第38次調査で発掘されている。15世紀中葉以降、志摩郡を支配する大友氏の出城としてその名が各種の文献資料に登場している。水崎城は志摩郡の入り口に位置しており、その攻防を巡って大きな役割を担っていたと推測される。

元岡の名称の初出は、鎌倉時代の嘉元3年（1305）である。元岡村は黒田領となった慶長年（1600）の石高が1,870石であったが、寛文5年（1665）、水崎の干拓、続いて天和2年（1682）、元禄4年（1691）と干拓工事が続けられ70町歩の田が完成した。これにより元岡村は桑原・今津・太郎丸・田尻・元岡の５ヶ村に分村された。

第３章　調査の記録

１．調査の概要

本書で報告する第21次調査地点は、福岡市西区大字桑原字石ヶ元・字別所地内に所在する。元岡・桑原遺跡群の北端部付近、字石ヶ元の丘陵及びその裾部、字別所の丘陵裾部に位置する。今回の発掘調査区は、図４に示したとおり１～３区の３地点に分かれており、拡幅以前の旧桜井太郎丸線より西側の平地を１区、石ヶ元古墳群のうち１～3号墳が立地する丘陵部を２区、桜井太郎丸線の東側に位置する丘陵裾部を３区としている。このうち２区の石ヶ元古墳群１～3号墳については、

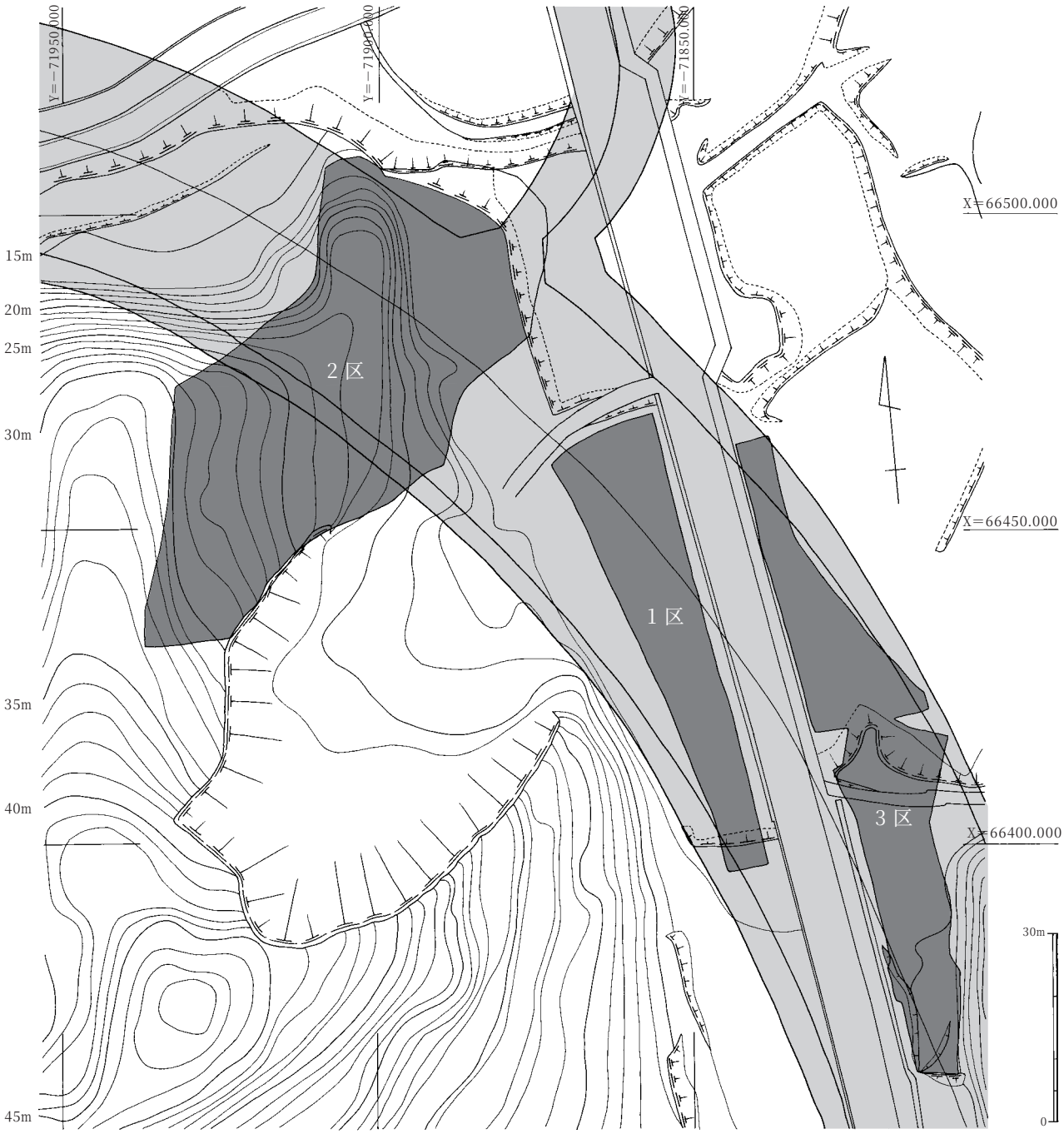


図3　調査区位置図（縮尺1/1,000）

平成8年度に内部主体と墳丘の確認調査を行った。また、3区については発掘調査の段階で18次調査としていたが、整理報告で21次とした。

１区の調査

１．検出遺構

1区は、西区大字桑原字別所、字石ヶ元地内に位置し、調査前の現況は畑であった。調査区北壁の土層観察から、図中に示した21層上で遺構検出を行った。調査の結果、検出された遺構は、時期不明の焼土坑4基、ピットなど極めて僅かであった。焼土坑は遺存状態が非常に悪く、その痕跡をとどめる程度であった。また、調査区の西側、丘陵裾部に南北方向の溝状遺構が複数検出された。土層断面観察から、畑作の耕地を丘陵側へ漸次開墾していった痕跡と考えられ、出土遺物から近世の所産と考えられる。

２．出土遺物

図５に示した20層から、13世紀代の青磁、土師器、滑石製石鍋などの遺物が出土した。総量はコンテナケースに　箱分である。図8に示した遺物は、全て包含層中からの出土である。

土師器

坏（1、2）

１は口径14.2cm、底径9.8cm、器高2.1cmに復元される。2は口径14.6cm、底径10.2cm、器高2.0cmに復元される。共に底部は回転糸切りで板目が残る。

皿（18）

18は口径6.7cm、底径3.8cm、器高1.8cmを測るほぼ完形品である。底部は糸切りである。

白　磁

碗（3）

３は白磁碗類で口径18.2cmに復元される。口縁部は輪花で、胎土は精良である。焼成は良好で色調は明灰色を呈する。

青　磁

碗（4～11）

4～11は全て龍泉窯系青磁碗である。4は口径15.1cm、底径6.3cm、器高7.4cmに復元される。底部は部分的に露胎で白色砂質土の目跡が残る。5は口径16.8cmに復元される口縁部片である。6は口径16.3cmに復元される口縁部片である。7は口径16.0cm、底径6.3cm、器高7.4cmを測る。底部は露胎で、目跡は観察されない。8は底径6.0cmを測る底部片である。外器面には鎬のない連弁文を、見込みには花文の印文が押される。底部は露胎で、目跡は観察されない。9は底径6.1cmを測る底部片である。見込みには判読不能な印文が施される。底部は露胎で目跡が見られる。10は底径6.3cmを測る底部片である。見込みには雲文が施される。底部は露胎で、黒色土の目跡が見られる。11は底径6.0cmを測る底部片である。見込みには判読不能な印文（金玉満堂か？）が中央からかなりずれた位置に施されている。

皿（12～14）

12は口径12.2cmに復元される。13は口径10.4cm、底径5.0cm、器高2.1cmに復元される。底部は露胎である。共に胎土は精良で、色調は黄みの灰色を呈する。14は底径5.6cmに復元される同安窯系青磁皿の底部片である。底部は釉薬が掻き取られ露胎である。見込みには櫛目文が施される。色調は緑みの白色を呈する。15は底径5.0cmに復元される同安窯系青磁皿の底部片である。底部は釉薬が掻き取られ露胎である。見込みには櫛目文が施される。色調は黄みの明灰色を呈する。共に胎土は精良で、焼成は良好である。

須恵器

高台付坏（16、17）

16は口径14.0cm、底径8.9cm、器高4.0cmに復元される。17は底径8.4cmに復元される。

土鍋（19～22）

19～22は土鍋片で、口径は35.0cm～41.6cm程度に復元される。いずれも内・外器面ともに粗い刷毛目を施すが、22には格子叩きの痕跡があるす。19の口唇部には刻目が施される。

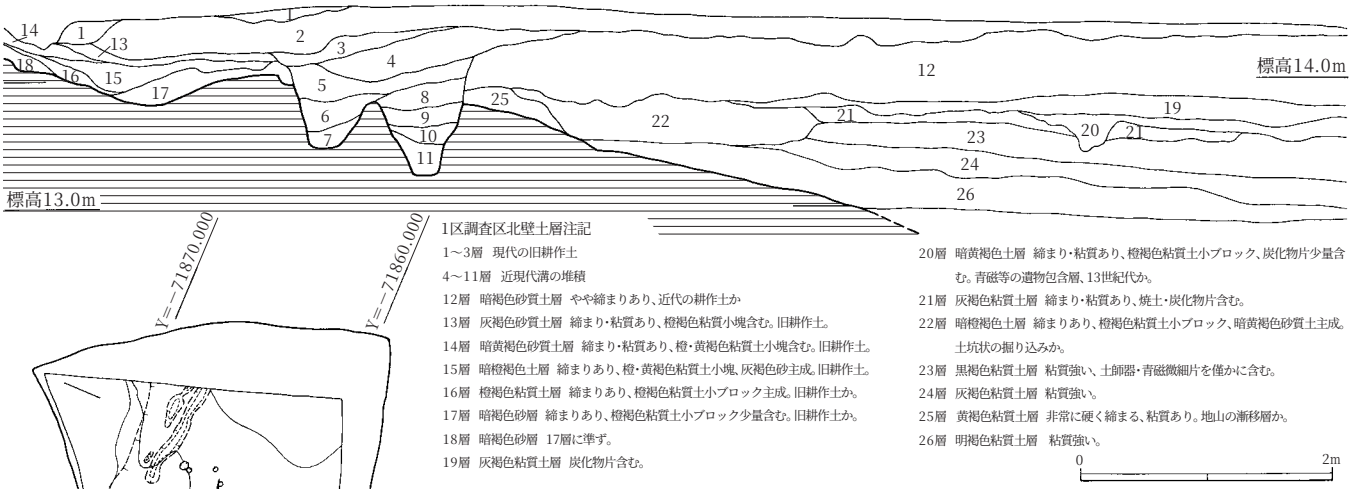


図４　１区遺構配置および調査区北壁土層断面図（縮尺1/400、1/60）

▲図５　調査区北壁土層（南から）

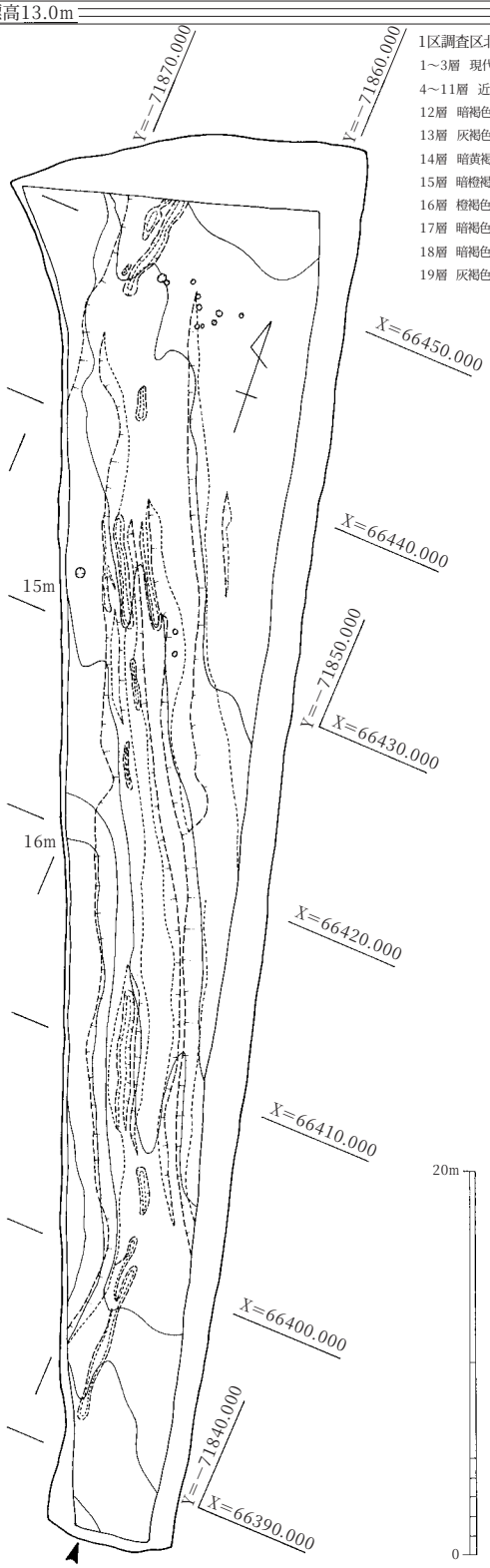


図６　撮影方向

▲図６　１区全景（南から）

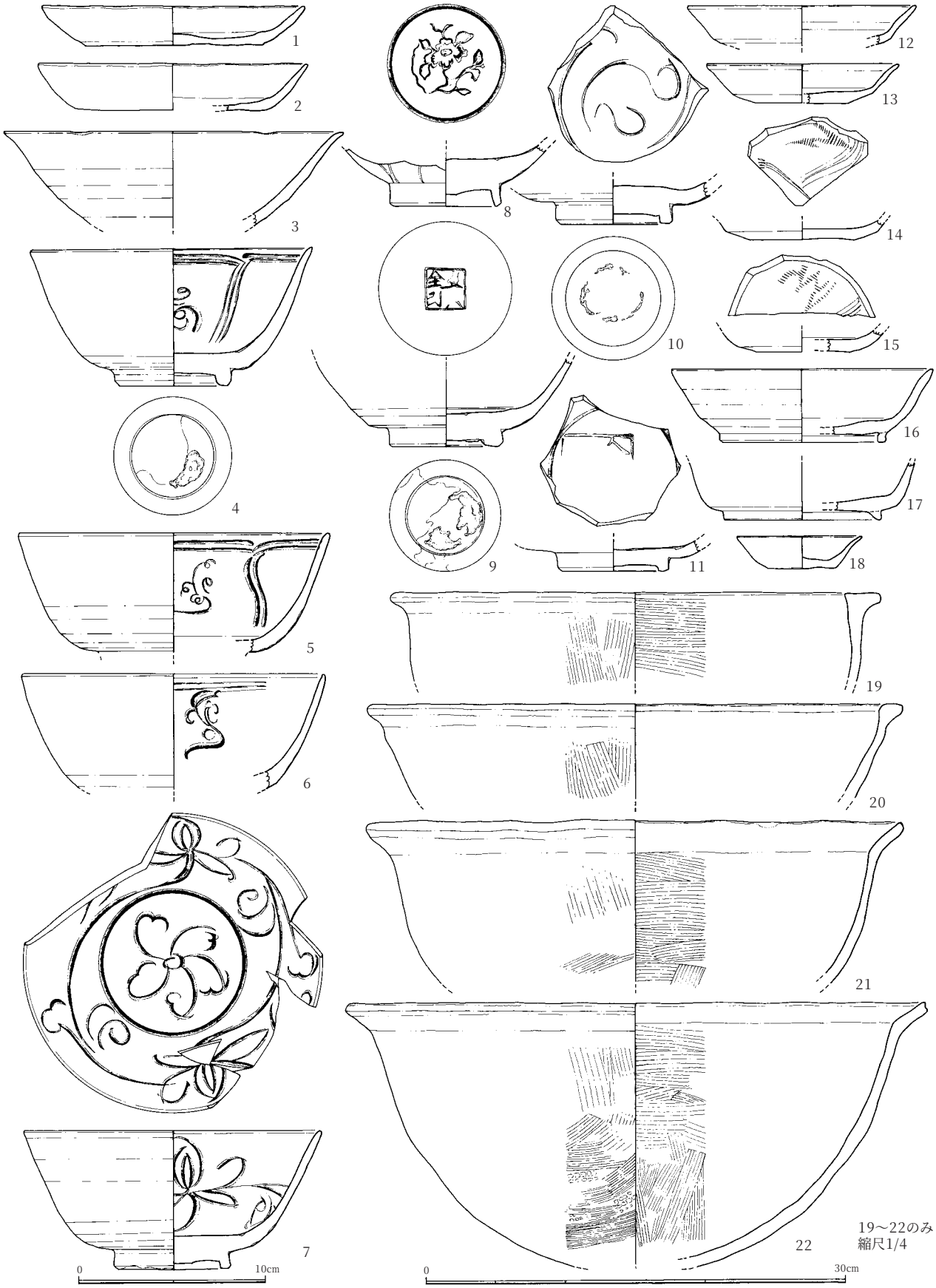


図７　１区出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4）

２区の調査

１．調査の概要

2区の調査は、平成8年度に確認調査を行った桑原石ヶ元古墳群の内、１号墳～3号墳までの本調査ある。平成８年度の確認調査では、１、3号墳内部主体の精査を行い、出土遺物の記録を行い、石室主軸に沿って墳丘規模とその構造確認を目的としたトレンチ調査を行った。以後、九州大学において、同古墳群の現地保存を巡って議論が重ねられたため、調査を一時中断した。

その後、本調査地点が一般県道桜井太郎丸線の拡幅に伴い造成されることとなり、現地保存が不可能と判断されたため、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

調査面積は2,055㎡で、調査期間は平成12年4月4日から平成12年10月20日にかけて行った。検出した遺構は、古墳時代後期の円墳３基、小石室墳１基、土坑墓　基、焼土坑4基である。出土遺物には、後述する古墳時代の遺物のほか、中世の青磁、白磁、土師器、瓦質土器などが出土しており、総量はコンテナケース8箱分である。

２．石ヶ元1号墳

（1）位置と現況（図10上）

石ヶ元1号墳は、桑原石ヶ元古墳群の北東端部に位置する。北側には大原川が東に向かって流れている。北側の谷部は田園で、更に北の丘陵裾部には桑原集落が広がる。本墳の南東側に位置する桑原古墳群Ａ群とは約100m離れている。周辺地形は、開削が激しく旧状の復元が困難だが、周辺の試掘調査の成果等から、本墳は尾根の端部に立地していたと推定される。また、西隣の２号墳との比高差は約４mで、尾根の旧地形はやや急峻であったと推測される。

調査前の現況は、石室中央部を境に墳丘が雛壇状に削平され、石室石材が露出していた。

（2）墳　丘（図10下～13）

周辺地形の削平が激しく、墳丘盛土は完全に削平されていた。また、石室掘方の一部を除き、墳丘基底面および周溝や墳裾も全く遺存していない。墳丘規模や構造などは、全く不明である。

石室掘方

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ平行に掘削されたと推定される。削平により全体の規模や状況が明確でないが、羨道部が窄まる隅丸方形もしくは長方形を呈していたと推定される。また基底面の状況から、基底部の幅は４m程度であったと考えられる。石室掘方と石室石材との間の裏込は、黄褐色砂質土や橙褐色粘質土を用いて版築状に充填されている。

（3）内部主体（図14～17）

1号墳の内部主体は、南東側に向かって開口する両袖式単室の横穴式石室と推定される。玄室主軸はN−30°−Wである。奥壁及び右側壁が完全に破壊されている。

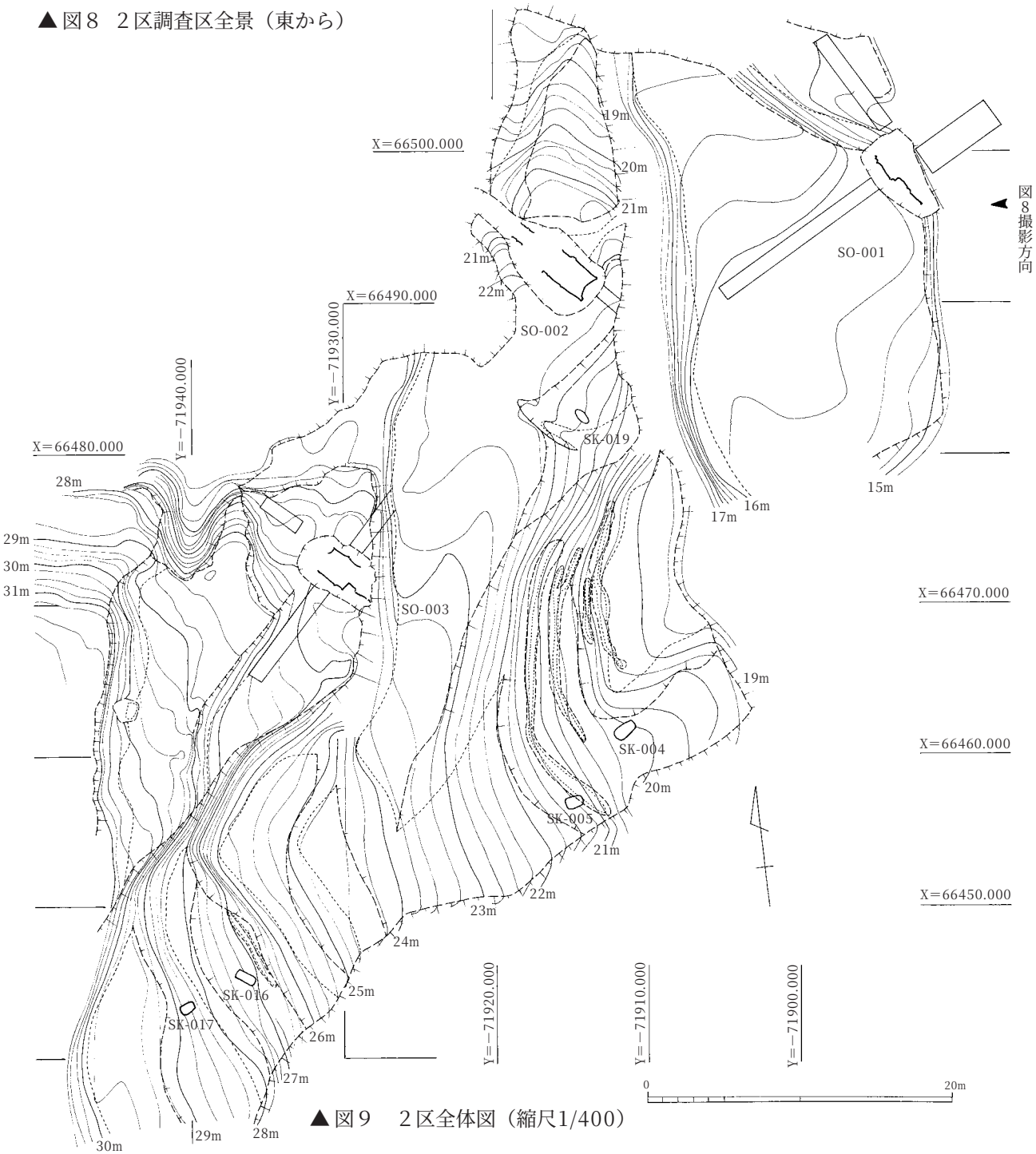
玄　室

玄室は、左側壁の腰石が残るのみで、規模は判然としない。腰石の最奥部に充填された石材が、玄室主軸に対して斜め方向に配されていることから、隅角の石材と考えられ、これにより左側壁長は190cmと考えられる。腰石は、長さ170cm×高さ160ｃm程度の大振りな花崗岩転石１石を横位に立てて使用している。

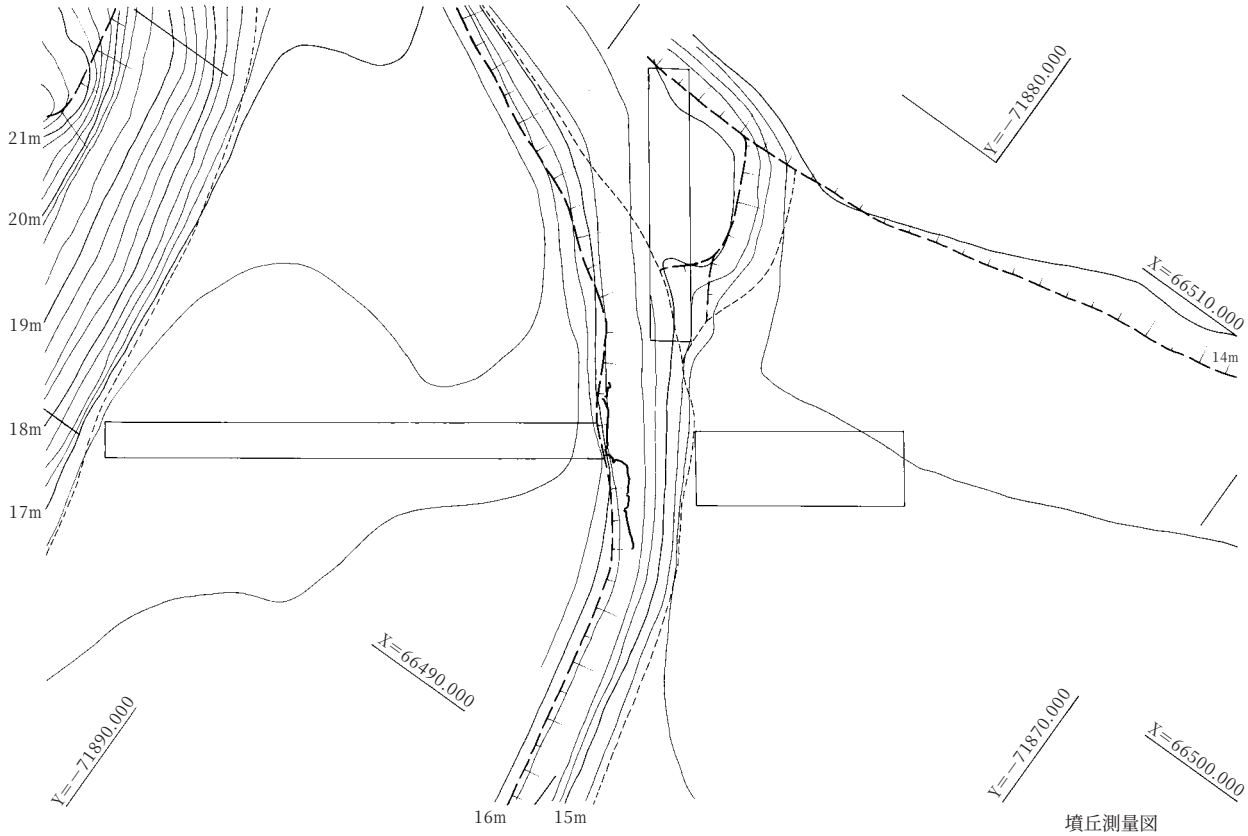
床面には、5～30cm程度の小礫で敷石が敷設されている。１面のみ確認したが、奥壁側を中心にかなり撹乱されている。また、石室基底面（地山）と敷石との間には、黄褐色砂質土が幅５cm程度充填されている。玄室の幅は不明であるが、玄室の床面が最大で約170cm遺存しており、玄室推定長と比較して、平面は正方形に近い形状であったものと推測される。

玄門部は、床面の形状から両袖であったと推測されるが、明確にできない。左袖幅は53cmを測

▲図８　２区調査区全景（東から）



▲図９　２区全体図（縮尺1/400）



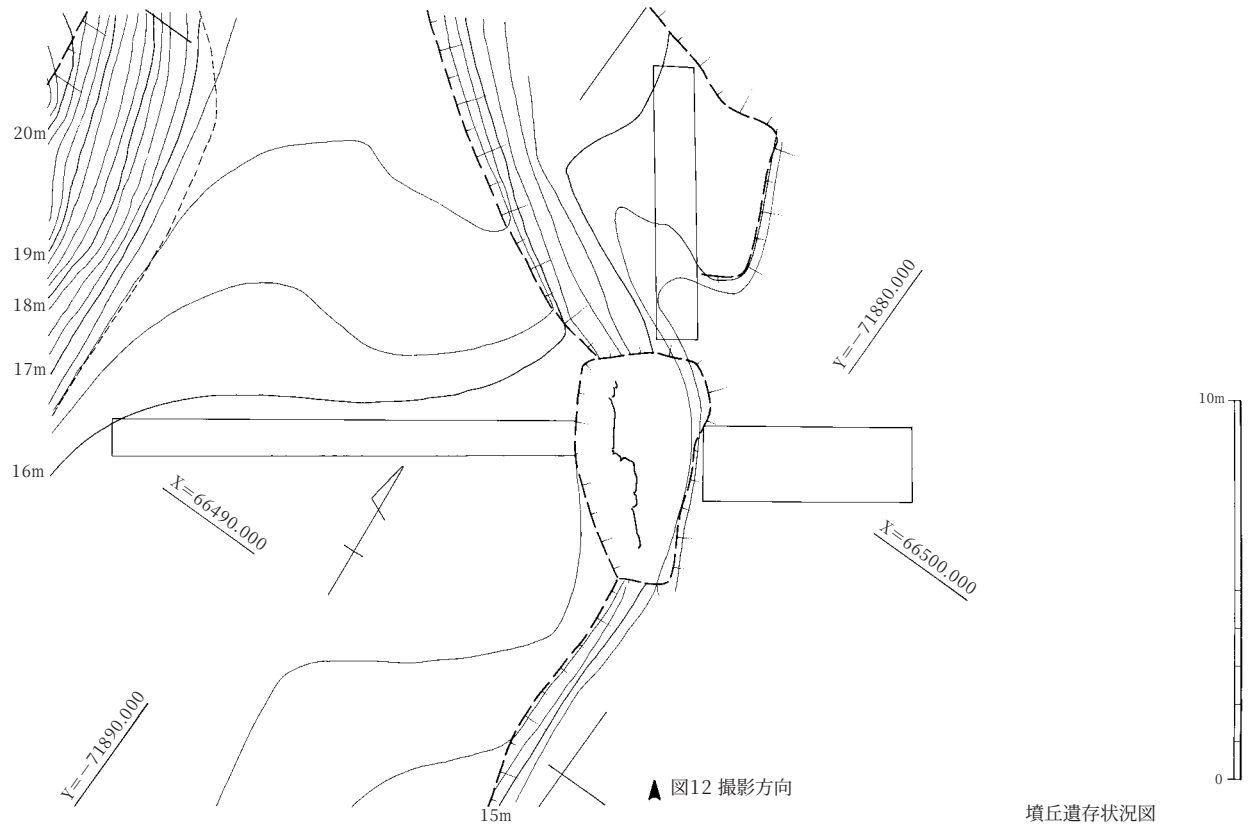
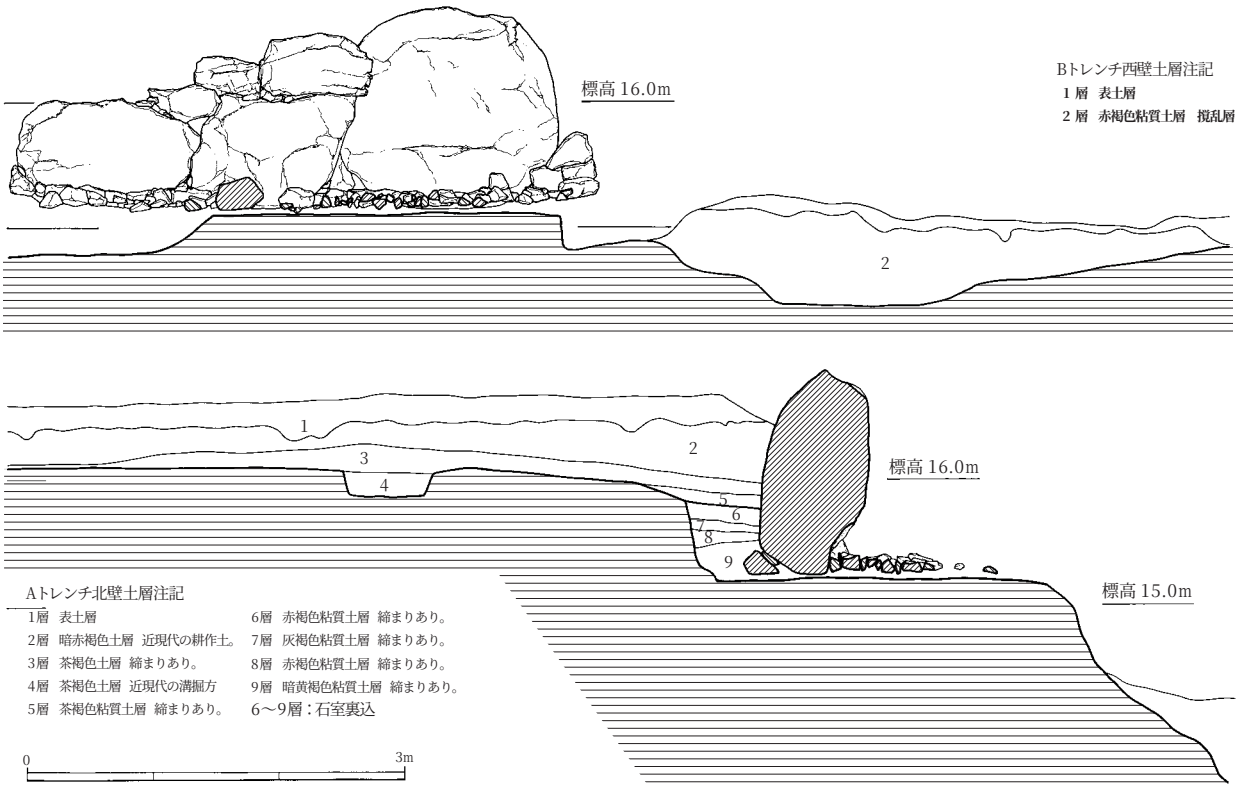


図10　石ヶ元１号墳現況測量図および墳丘遺存状況図（縮尺1/200）

▲図11　石ヶ元１号墳全景（南から）

▲図12　石ヶ元1号墳墳丘断面（南から）



▲図13　石ヶ元１号墳墳丘断面図（縮尺1/60）

る。腰石は、長さ110cm×高さ90cmの花崗岩転石を横位に立てて使用している。2段目の石材は小振りで、長さ90cm×高さ50cmの転石を横位に積み、やや玄室側に持ち送られている。

羨　道

羨道も左側壁の一部が遺存するのみで、規模は不明である。腰石は、玄門部と高さを揃えるよう石材を横位に配し、平坦面を内側に向けて使用している。

床面には、玄室と同様に敷石が敷設され、1ヶ所に梱石を配する。梱石は1石のみ遺存する。長さ95cmを測る棒状の玄武岩(野北石)を利用している。梱石の位置は、玄門部のやや羨道側に置かれている。羨道幅は不明であるが、梱石の長さから1m前後と推測される。

閉塞施設は遺存しない。

（4）出土遺物（図14、18～23）

出土状況（図14下、20～23）

石室床面の副葬品を中心に、墳丘周辺の削平された土砂の中から遺物が出土した。

石室の副葬品には、須恵器や土師器の他、鉄製武具や馬具、装身具などがある。特筆すべき遺物としては鉄地金銅製張花形杏葉がある。土器は玄門の左側壁際にまとまった状態で出土した。これらの遺物は最後の追葬段階で副葬された遺物と考えられ、この時の元位置を保っていると考えられる。鉄鏃等の鉄製武具類は玄室左側壁側から、花形杏葉は玄室前半部から出土しているが、やや散乱した状態であり、追葬時に動かされたか、もしくは盗掘や石材の抜き取りの段階で撹乱されたものと推定される。装身具類は玄室床面から散乱した状態で出土している。

また、墳丘の周辺からは須恵器などのほか、中世の土師器坏・皿、土師質土器片口、瓦質土器羽釜、朝鮮陶磁器などが出土した。中世の遺物の総量は、コンテナケース4箱分である。

遺　物（図18、19）

須恵器

器種は、坏（身、蓋）、高台付坏、蓋、平瓶、高坏片、甕や瓶の口縁部片などがある。

坏　身（26）

26は口径12.0cm、底径7.8cm、器高3.1cmを測る。底部には回転ヘラ削りを施す。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。

坏　蓋（29、30）

29は口径11.5cm、受部径13.6cm、器高3.0cmを測る。天井部の約1/2に回転ヘラ削りを施し、退化したボタン状の摘みが付く。口縁部はかえり端部より突出する。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。30は口径10.4cm、受部径12.5cm、器高2.2cmを測る。天井部約1/2に回転ヘラ削りを施す。口縁部はかえり端部より僅かに突出する。焼成良好で青灰色を呈する。

高台付坏（27、28）

27は口径13.0cm、高台径7.8cm、器高3.5cmに復元される。色調は暗灰色を呈し、外器面に自然釉が付着する。28は口径14.0cm、高台径9.6cm、器高4.5cmに復元される。色調は青灰色を呈し、外器面に自然釉が付着する。

蓋（31）

31は口径8.4cm、器高2.5cmを測る。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。外器面に自然釉が付着する。

平　瓶（23～25、37、38）

23は胴部最大径13.3cm、口縁部径5.4cm、器高11.2cmを測る。底部は鈍い丸底を呈し、回転ヘラ削りを施す。頸部のほぼ中央と胴部の肩に浅い凹線が巡る。天井部および頸部内器面に自然釉が僅かに付着している。24は胴部最大径14.7cm、口縁部径6.2cm、底径9.0cm、器高11.4cmを測る。底部は平底で、天井部及び頸部外器面にはカキ目を施す。焼成は良好で、色調は暗青灰色を呈する。25は胴部最大径17.3cm、底径9.8cmを測る。底部は平底で、天井部にはカキ目を施し、頸部周辺はナデを施す。焼成は良好で、色調は明灰色を呈する。37、38は頸部片で、口径は順に8.4、5.4cmを測る。

高　坏（33）

脚部上端から坏部下半にかけての小片である。焼成はややあまく、色調は黄灰色を呈する。

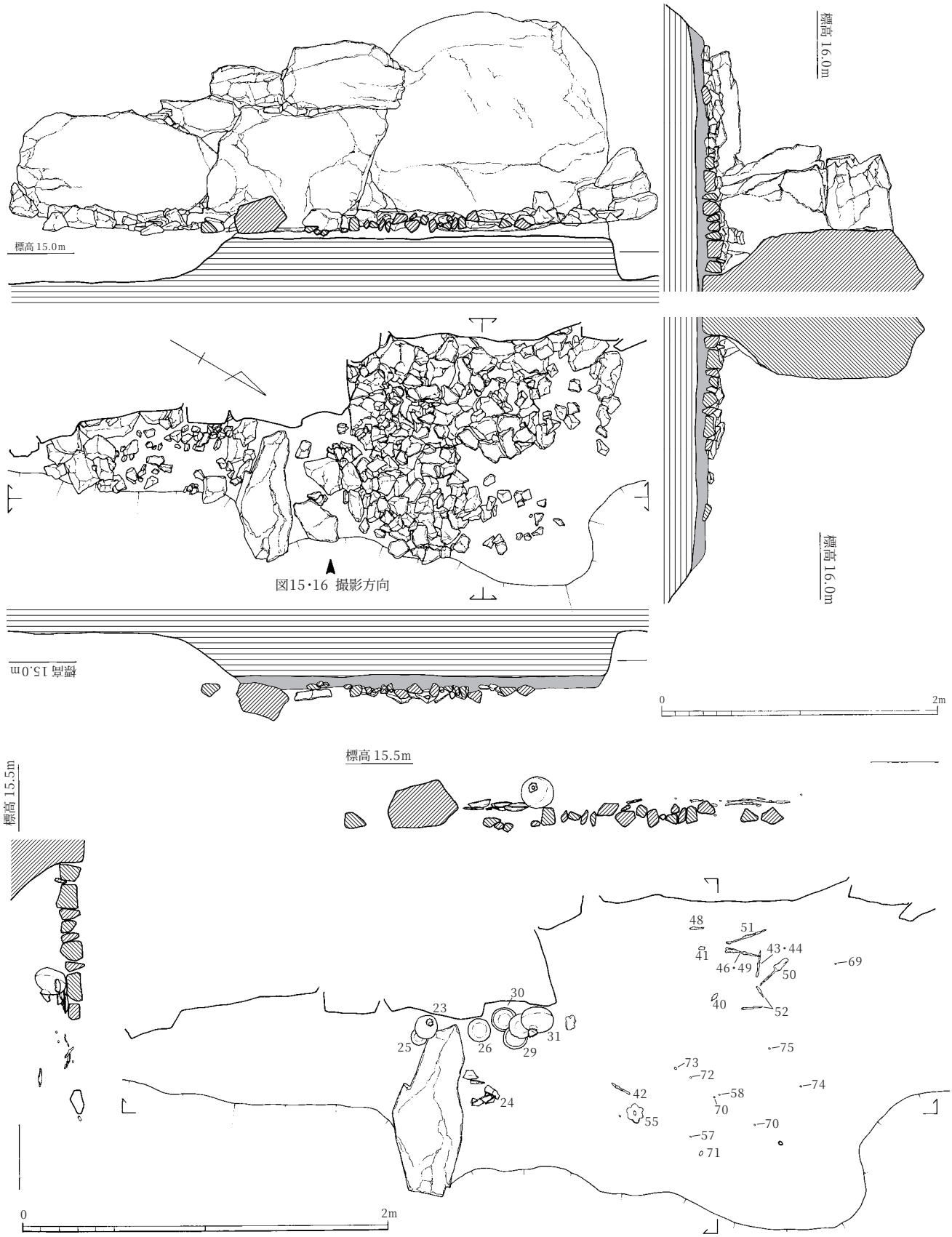


図14　石ヶ元1号墳石室実測図および遺物出土状況図（縮尺1/40、1/30）

▲15図　石ヶ元1号墳石室左側壁（東から）

▲16図　石ヶ元1号墳石室全景（東から）

▲17図　石ヶ元1号墳石室基底面の状況（東から）

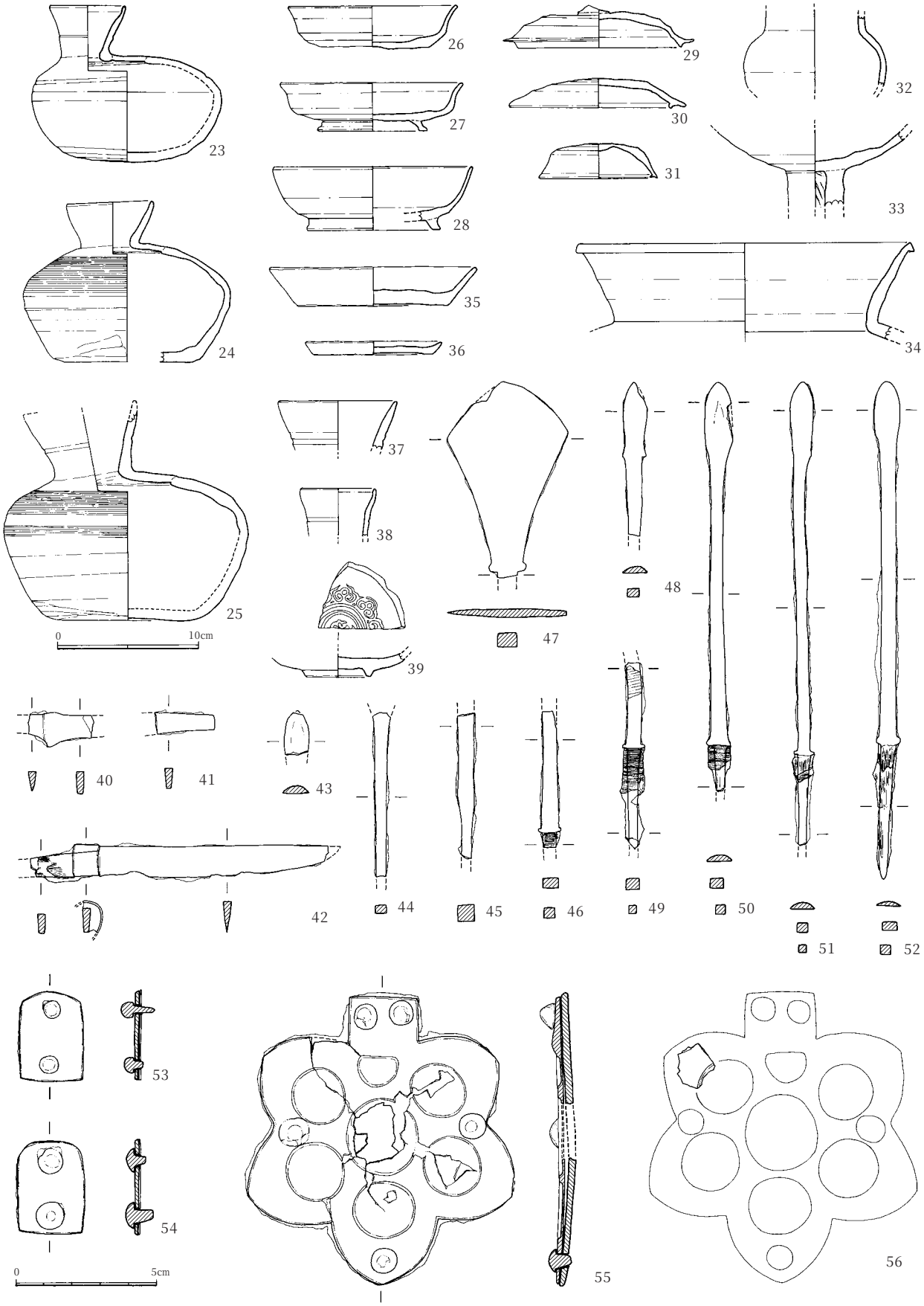
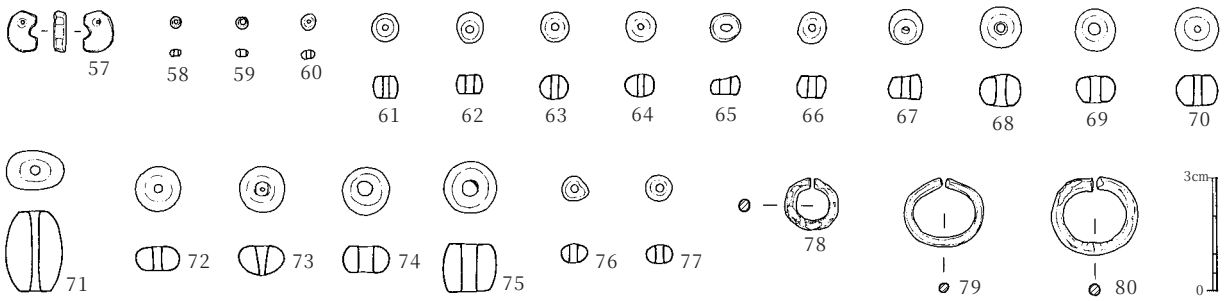


図18　石ヶ元1号墳出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）



▲図19　石ヶ元1号墳出土装身具実測図（縮尺1/2）

▲図20　石ヶ元1号墳須恵器出土状況（東から）

▲図21　石ヶ元1号墳鉄鏃等出土状況（東から）

▲図22　石ヶ元1号墳花形杏葉出土状況（東から）

▲図23　石ヶ元1号墳勾玉棗玉出土状況（東から）

甕（34）

口縁部の破片で口径23.2cmに復元される。口縁部断面は三角形を呈し、やや下方に伸びる。色調は淡青灰色を呈する。

土師器

壷（32）

32は胴部最大径10.0cm程度に復元される壷片である。器面の磨滅が激しく、調整を観察できない。焼成はあまく、色調は黄褐色を呈する。

工　具

刀　子（40～42）

40は関部の小片で、刀厚0.3cm、刀身元幅1.2cmを測る。41は茎部の小片で、尻幅は0.5cmを測り、角尻である。42は切先と茎尻が欠損している。残存長10.6cm、刀身元幅1.1cm、刀身厚0.3cm、茎口幅0.9cm、茎厚0.3cmを測る。柄縁金具は一部が残るのみで、断面は倒卵形と推定される。

武　器

鉄　鏃（43～52）

43は柳葉形鉄鏃の鏃身部の小片で鏃身幅0.9cm、鏃身厚0.3cmを測る。44は頸部片、45は茎部片である。46は頸部から関部にかけての破片で、棘状関である。48は長頸片丸造柳葉形鉄鏃片で、鏃身長2.7cm、厚0.3cm、幅0.9cmを測る。

49は頸部から茎部にかけての破片で棘状関である。矢柄の木質が残り、樹皮状の有機質を螺旋状に巻き付けている。50～52は長頸箆被片丸造柳葉形鉄鏃で、鏃身は撫関、関部は棘状関である。50は残存長14.5cm、鏃身長2.5cm、頸部長10.4cmを測る。茎部に矢柄の木質が僅かに残る。51は残存長16.4cm、鏃身長3.0cm、頸部長10.1cmを測る。52は完形品で、全長17.6cm、鏃身長2.1cm、頸部長10.7cm、茎部長4.7cmを測る。茎部に矢柄の木質が僅かに残る。

馬　具

鉄地金銅張爪先形帯金具（53、54）

共に形状は上方が緩やかな弧線を描き、下方は方形を呈する。厚さ1mm程度の薄い鉄板の上下２ヶ所を鋲で固定している。背面には有機質の痕跡が認められる。53は長3.2cm、幅2.3cm、鋲径0.6～0.7cm、鋲高0.5～0.6cmを測る。54は長3.35cm、幅2.3cm、鋲径0.9～1.0cm、鋲高0.3cmを測る。１対であり、杏葉の吊金具か。

鉄地金銅張花形杏葉（55、56）

55は長さ9.3cm、幅9.5cmを測るほぼ完形品である。厚さ3mmの鉄製地板に厚さ1.5mmの薄い上板を重ね、立聞は2ヶ所、身部は3ヶ所を頭が円形の鋲で固定している。上板の端部は面取りされており、立聞のみ方形を呈し、身部は優美な花形文を描く。身部の上面には七曜文状に凹円文が配され、立聞の下のみ逆蒲鉾形を呈する。円文径1.9～2.5cm、鋲頭径0.8～1.1cm、鋲頭高0.3～0.5cmを測る。56は身部凹円文付近の小片である。ともに接合せず別個体で、１対2個体が副葬されていたと考えられる。

装身具

翡翠製勾玉（57）

57は高1.1cm、幅0.8cm、厚0.3ｃｍを測る小型品である。色調は透明感のある翠色を呈し、部分的に白濁して斑模様を描く。丁寧に研磨されており、両側から穿孔される。孔径は１mmに満たない。

琥珀製棗玉（71）

71は長径1.5cm、短径1.0cm、高2.1cmを測る。形状は、縦断面が均整のとれた棗形を呈するが、横断面はやや不整形な楕円形である。器面は丁寧に研磨され、両側から穿孔されたものと推定される。孔径は0.1～0.2cmを測る。色調は暗紅色を呈し、部分的に橙色から茶色の縞が入る。

ガラス製玉類（58～70、72～75）

58～67は小玉、68～70、72～75は丸玉である。色調は紺青系統と黄緑色系統の２者に大別される。大半は引き伸ばし技法で製作されているが、73は精巧な円形を呈し、孔径が上下で大きく異なり、ガラス内部の気泡の動きが見られないことから、鋳型で製作されたものと推測される。

土製玉類（76、77）

共に直径0.7cmを測る小玉で、形状は不整形である。色調は黒色を呈する。

耳　環（78～80）

77は銅芯銀張（銀板張か）製で短径1.35cm、長径1.4cm、内短径0.85cm、内長径0.95cm断面径0.3～0.35cmを測る。78は鉄製もしくは銀製で短径1.8cm、長径2.1cm、内短径1.35cm、内長径1.65cm、断面径0.25cmを測る。端部がやや直線的で環状を呈していない。78は銅芯金張製で短径2.0cm、長径2.3cm、内短径1.4cm、内長径1.65cm、断面径0.3cmを測る。管内側の金板に皺が寄っている。

土師器（35、36）

坏（35）

35は口径14.8cm、底径10.5cm、器高2.8cmを測る。底部は回転糸切りで切り離され、色調は明赤褐色を呈する。

皿（36）

36は口径9.6cm、底径8.2cm、器高0.9cmを測る。底部は回転糸切りで切り離され、色調は暗黄褐色を呈する。

朝鮮陶器（39）

皿（39）

39は朝鮮陶器の皿で、底径4.6cmに復元される。胎土は精緻で砂粒を含む。外器面は施釉され、色調は黄みの灰色を呈し、嵌入が入る。白色粘土を用いて印花文が施される。底部は露胎。

３．石ヶ元２号墳

（1）位置と現況（図25上）

石ヶ元２号墳は、1号墳西側の尾根上に位置し、中心間で約20m離れている。

調査前の現況は山林であった。内部主体付近が大きく陥没しており、石材が抜き取られていることが予想された。また2号墳が位置する尾根の東西と北側は、大きく削平されており断崖状を呈していた。尚、平成8年度に行った確認調査では、内部主体の掘り下げを行ったが、石室の確認には至っておらず、墳丘規模と構造を確認するためのトレンチ掘削も行っていなかった。

（2）墳　丘（図25～31）

地山整形

２号墳築造に伴う地山整形は、南側（丘陵側）の馬蹄形溝の掘削と北側の墳裾の削り出し、及び墳丘基底面の整地からなると考えられる。南側の馬蹄形溝は大きく削平され、墳丘III区で一部が確認されたのみである。馬蹄形溝底の標高は21.5m～22.3mを測り、尾根の頂部から墳丘の前面および後背部に向かって緩やかに傾斜していたと推測される。断面は、緩やかなU字形を呈し、石室の中心から12mを測る。

墳丘北側の墳裾の削り出しは、標高18.8m付近で行われており、馬蹄形溝底部と同様、石室の中心から12mを測る。尾根の削平により、長さ4m程度が遺存するのみである。

墳丘基底面の整地は、石室掘方の南北で異なる。北側の墳丘Ⅰ・Ⅱ区では、墳裾の標高18.8m付近から、石室掘方の21.3m付近までの緩やかな丘陵斜面を利用して基底面としている。これに対し墳丘III・IV区では、標高22.2m付近で平坦面を削り出して基底面としている。

盛　土

盛土の工程は、大きく２段階に分けられる。

第一段階の盛土は、石室壁石の裏込的なもので、石室石材の積み上げと並行して行われたと推測される。橙褐色や黄褐色などの砂質土と粘質土を用いて、版築状に充填されている。

第二段階の盛土は、墳丘基底面より上の墳丘の整形である。粘質土小ブロックを含んだ黄褐色や橙褐色等の砂質土を、幅10～20cmの単位で版築状に非常に硬く叩き締めている。盛土は最大で90cm程度遺存しているが、大部分は削平され失われている。

図24　石ヶ元2号墳全景（南東から）

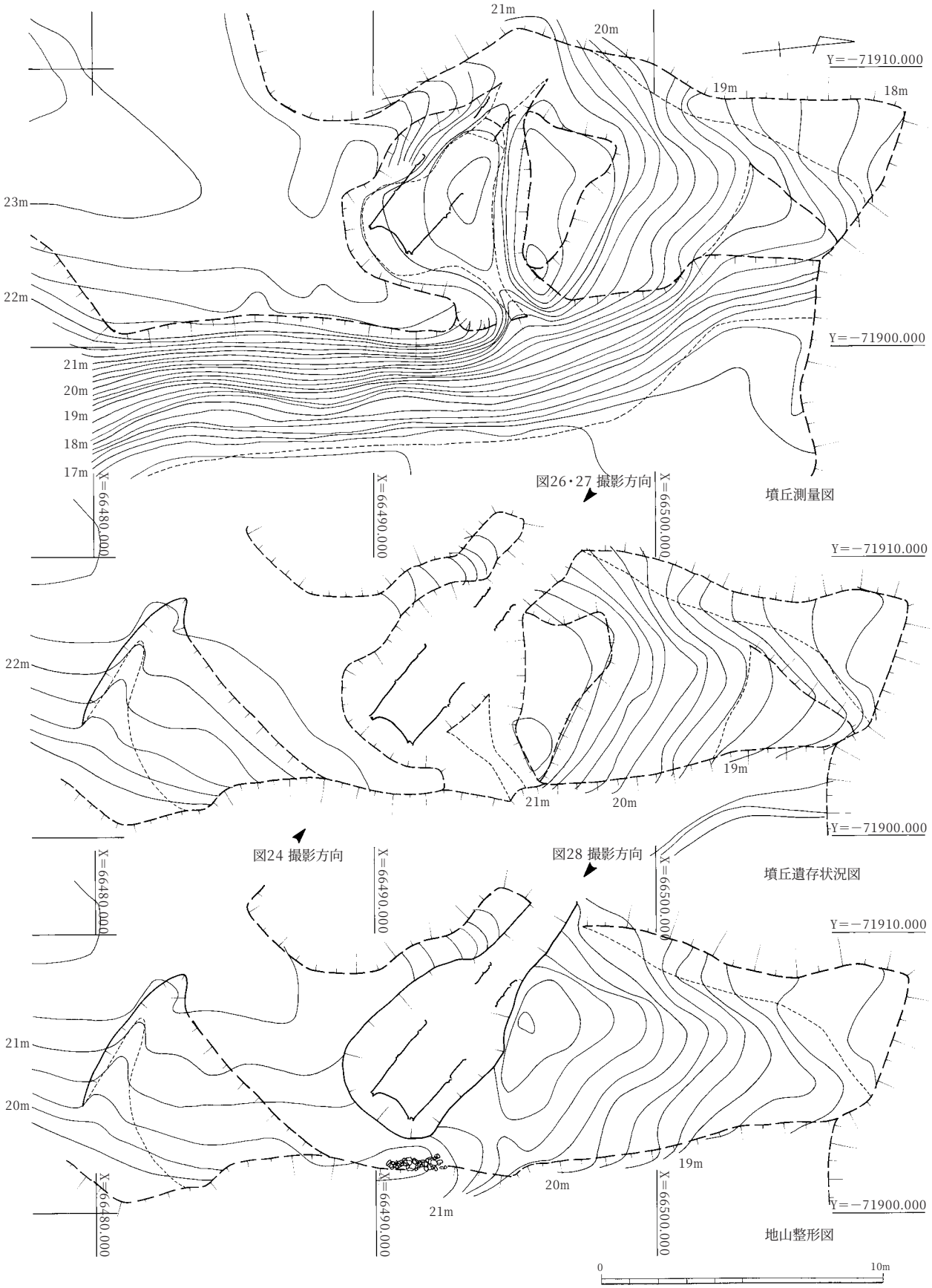
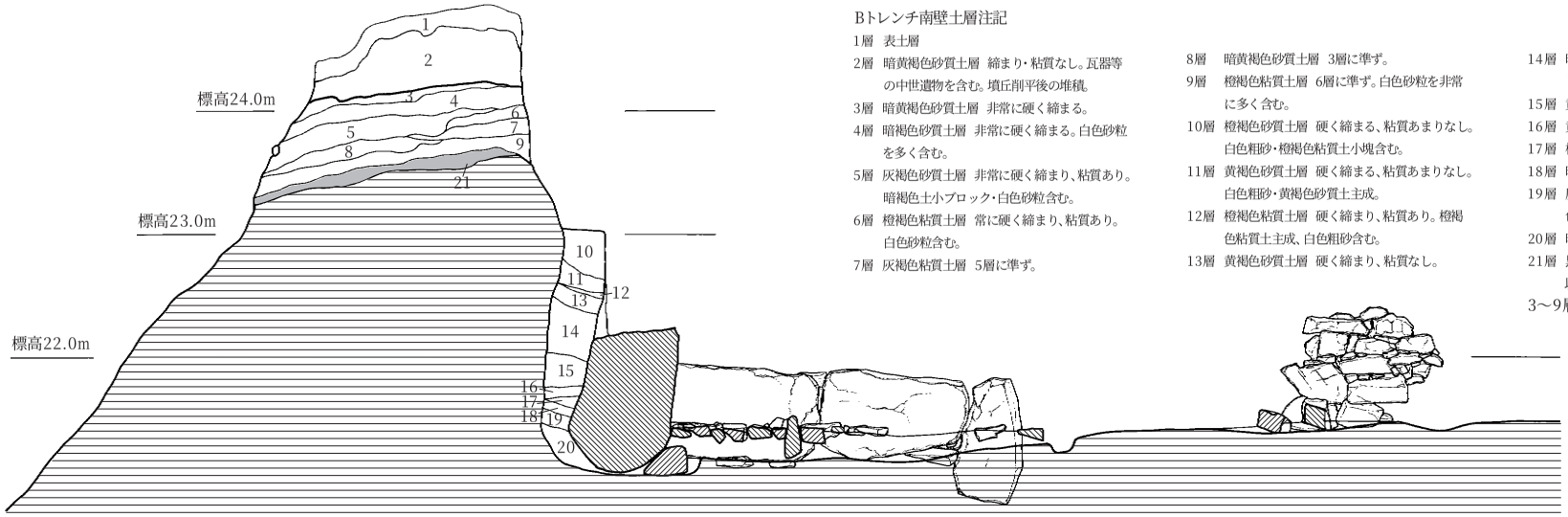


図25　石ヶ元2号墳墳丘測量図、墳丘遺存状況図および地山整形図（縮尺1/200）

▲図26　石ヶ元2号墳墳丘遺存状況（北西から）

▲図27　石ヶ元2号墳墳丘断面（北西から）

▲図28　石ヶ元2号墳地山整形（北西から）



Bトレンチ南壁土層注記

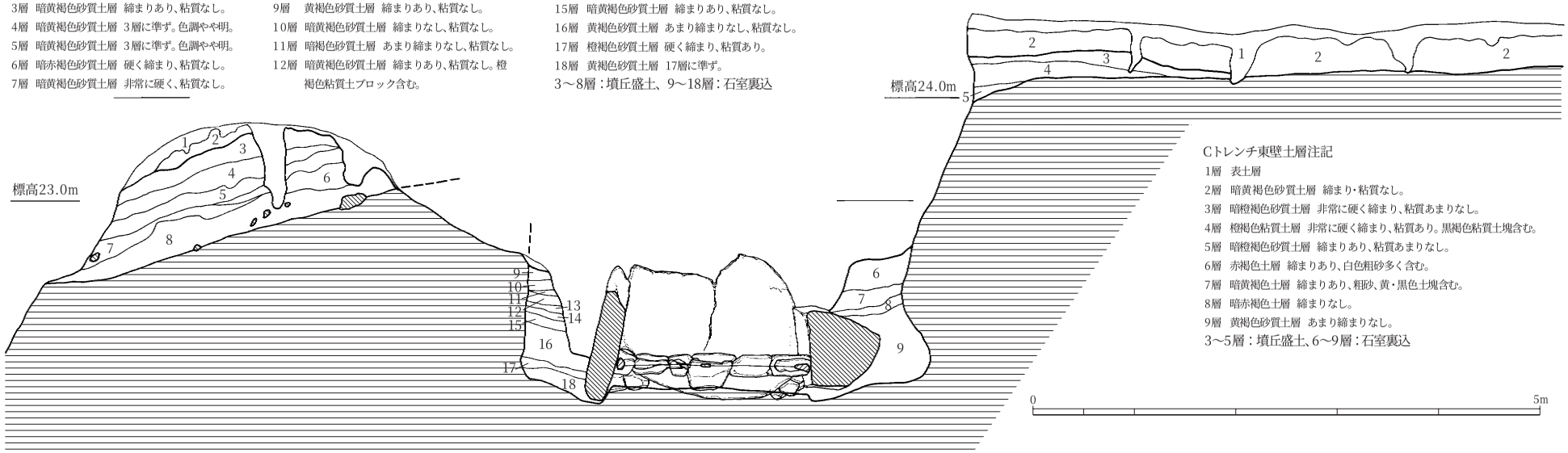
1層　表土層
2層　暗黄褐色砂質土層　締まり・粘質なし。瓦器等の中世遺物を含む。墳丘削平後の堆積。
3層　暗黄褐色砂質土層　非常に硬く締まる。
4層　暗褐色砂質土層　非常に硬く締まる。白色砂粒を多く含む。
5層　灰褐色砂質土層　非常に硬く締まり、粘質あり。暗褐色土小ブロック・白色砂粒含む。
6層　橙褐色粘質土層　常に硬く締まり、粘質あり。白色砂粒含む。
7層　灰褐色粘質土層　5層に準ず。
8層　暗黄褐色砂質土層　3層に準ず。
9層　橙褐色粘質土層　6層に準ず。白色砂粒を非常に多く含む。
10層　橙褐色砂質土層　硬く締まる、粘質あまりなし。白色粗砂・橙褐色粘質土小塊含む。
11層　黄褐色砂質土層　硬く締まる、粘質あまりなし。白色粗砂・黄褐色砂質土主成。
12層　橙褐色粘質土層　硬く締まり、粘質あり。橙褐色粘質土主成、白色粗砂含む。
13層　黄褐色砂質土層　硬く締まり、粘質なし。
14層　暗黄褐色砂質土層　あまり締まりなし、粘質なし。橙褐色粘質土小量含む。
15層　黄褐色砂質土層　16層に準ず、色調やや明るい。
16層　黄褐色砂質土層　締まりあまりなし、粘質なし。
17層　橙褐色砂質土層　締まりあまりなし、粘質なし。
18層　暗褐色砂質土層　締まり・粘質なし。
19層　灰褐色砂質土層　やや締まり、粘質あり。黒褐色粘質土多く含む。
20層　暗褐色砂質土層　あまり締まりなし、粘質なし。
21層　黒褐色有機質腐食土層　硬く締まる。古墳造営以前の旧表土層。

3～9層：墳丘盛土、10～20層：石室裏込

Aトレンチ東壁土層注記

1層　表土層
2層　暗赤褐色砂質土層　締まりなし。
3層　暗黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。
4層　暗黄褐色砂質土層　3層に準ず。色調やや明。
5層　暗黄褐色砂質土層　3層に準ず。色調やや明。
6層　暗赤褐色砂質土層　硬く締まり、粘質なし。
7層　暗黄褐色砂質土層　非常に硬く、粘質なし。
8層　黄褐色砂質土層　非常に硬く締まり、粘質なし。拳～人頭大の礫多く含む。
9層　黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。
10層　暗黄褐色砂質土層　締まりなし、粘質なし。
11層　暗褐色砂質土層　あまり締まりなし、粘質なし。
12層　暗黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。橙褐色粘質土ブロック含む。
13層　暗黄褐色砂質土層　12層に準ず。
14層　橙褐色砂質土層　締まり・粘質あり。
15層　暗黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。
16層　黄褐色砂質土層　あまり締まりなし、粘質なし。
17層　橙褐色砂質土層　硬く締まり、粘質あり。
18層　黄褐色砂質土層　17層に準ず。

3～8層：墳丘盛土、9～18層：石室裏込



Cトレンチ東壁土層注記

1層　表土層
2層　暗黄褐色砂質土層　締まり・粘質なし。
3層　暗橙褐色砂質土層　非常に硬く締まり、粘質あまりなし。
4層　橙褐色粘質土層　非常に硬く締まり、粘質あり。黒褐色粘質土塊含む。
5層　暗橙褐色砂質土層　締まりあり、粘質あまりなし。
6層　赤褐色土層　締まりあり、白色粗砂多く含む。
7層　暗黄褐色土層　締まりあり、粗砂、黄・黒色土塊含む。
8層　暗赤褐色土層　締まりなし。
9層　黄褐色砂質土層　あまり締まりなし。

3～5層：墳丘盛土、6～9層：石室裏込

図29　石ヶ元2号墳墳丘断面図（縮尺1/60）

▲図30　石ヶ元2号墳外護列石と墳丘土層（北から）

▲図31　石ヶ元2号墳外護列石検出状況（北から）

墳丘規模は、石室の中心から周溝までの距離を反転して、直径22m程度の円墳と推定され、本古墳群内で最大の規模をもつ。

外護列石（図30、31）

墳丘Ⅱ区では、墳丘構築以前の旧表土層上で外護列石が検出された（図31、32参照）。この外護列石は、10～50cm程度の花崗岩礫を、石室の中心から3.5m付近に弧線状に組んでいる。外護列石は撹乱と削平により長さ２m程度が遺存するのみであるが、墳丘Ⅱ区にのみに構築されたと考えられ、丘陵下方への墳丘崩壊を防止する目的で行われたものと考えられる。

また、墳丘Ⅰ区では、墳丘基底面直上の盛土（８層・黄褐色砂質土層）中に、拳大から人頭大の礫が多量に含まれていた。これらの石材は、列石状に組まれていないが、他の層では礫を殆ど含んでおらず、Ⅱ区の外護列石と同様に、墳丘の崩壊防止を目的として混入されたものと推測される。

石室掘方

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ平行に掘削されたと推定される。羨道部が窄まる隅丸長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。掘削面での規模は、長さ10.4m、幅4.25m、最も深い部分で深さ3.0mを測る。

（３）内部主体（巻頭図版２、図32～44）

２号墳の内部主体は、北西側に向かって開口する両袖式単室の横穴式石室である。玄室主軸はN－43°－Wである。玄室は腰石と羨道側壁の一部を留めるに過ぎない。

玄　室

玄門部の石材が抜き取られているが、遺存する石材から玄室規模は、奥幅177cm、前幅180cm、右側壁長312cm、左側壁長283cmを測る長方形平面を呈すると考えられる。遺存する壁体の石材は、全て花崗岩転石と割石である。

奥壁には、巨大な花崗岩転石１石を立てて腰石としているが、石材の上部が楔を用いて割られており、高さが不明であるが、少なくとも145cm以上ある。また、幅170cm、厚さ80cmを測り、両側壁に挟まれている。

左側壁は、２石を用いて腰石としている。奥壁側の石材は、長さ200cm×高さ130cm×厚さ25cmを測る大振りで扁平な石材をやや内傾させて立てている。玄門側の石材は、長さ95cm×高さ80cmを測る割石を用い、平坦面を天端に向けている。

右側壁は３石を用いて腰石としている。平坦面を天端とし、目路がよく揃っている。奥壁側の石材から順に、長さ150cm×高さ75cm、長さ120cm×高さ75cmを横位に立てているが、最も玄門側の石材のみは、高さ100cm×幅55cmの転石を立てて使用している。石材据付の掘り込みが地山から50cmと深く、腰石天端の目路を通す意図が明確に窺える。

玄門部は、石材の抜き取り痕の状況から、両袖で長さ80～100cm程度であったと推測される。

床面には敷石が敷設され、奥壁側に屍床が構築されている。床面は大きく撹乱されており、何面敷設されていたか不明である。敷石の敷設は、石室基底面の上に黄褐色砂質土を20cm程度盛って敷設している。

屍床は奥壁より95～115cmの位置に、長さ20～45cmの花崗岩を６個並べて構築される。屍床は、初葬時の被葬者を安置する区画と推定される。屍床内の床面は10～50cmの花崗岩と玄武岩で敷石を敷設した上に、５～10cm程度の川原石を敷き詰めている（巻頭図版２参照）。

屍床外の床面は大きく破壊されているが、屍床内と同様、花崗岩礫の敷石上に川原石が敷かれていたと考えられる。また、内部主体の掘り下げを行っている段階で、多量の川原石が出土しており、このことの証左となろう。

羨　道

羨道は後半の石材が抜き取られ、規模が判然としないが、前半部の状況から長さ3.0～3.1m程度と推定される。端部付近の壁石が一部遺存しているが、使用される石材は大きいもので長さ50cm程度と全体に小振りである。石材は横位に積まれており、５～６段程度が遺存している。また、ほぼ水平方向に目路が通っている様子が窺える。

床面には、２か所に梱石が敷設されていたものと考えられるが、第二梱石は抜き取られており、掘方のみが残る。石材の抜き取り痕から、両袖石の間に配され、奥壁からの距離は300cmと考えられる。第一梱石は、羨道端部付近に敷設され、長さ45cmの石材２石を並べ、更に右側壁との間隙に小礫を充填している。奥壁からの距離は510cmを測り、両梱石間の距離は190cm程度と推定される。

床面には僅かに敷石が遺存しており、両梱石間には全面に敷石があったものと推測されるが、ほとんどが破壊されている。また第一梱石より墓道側には敷石が確認されず、第一梱石付近を除き直接地山となっている。

石室基底面の状況（図34、35右）

敷石とその埋土を完全に除去して観察した。腰石周壁に沿って、腰石の安定を図るための掘り込みが巡る。深さは、床面から平均5～20cm程度であるが、右側壁の一部は石材を縦位に使用しているため、深さ50cm程度を測る。また腰石と地山の間には、20～50cmの礫を用いた根石が配される。また玄門から羨道の石材抜き取り痕では、それを囲むように地山を掘削し根石を配しており、各石材の大きさがある程度推測される。

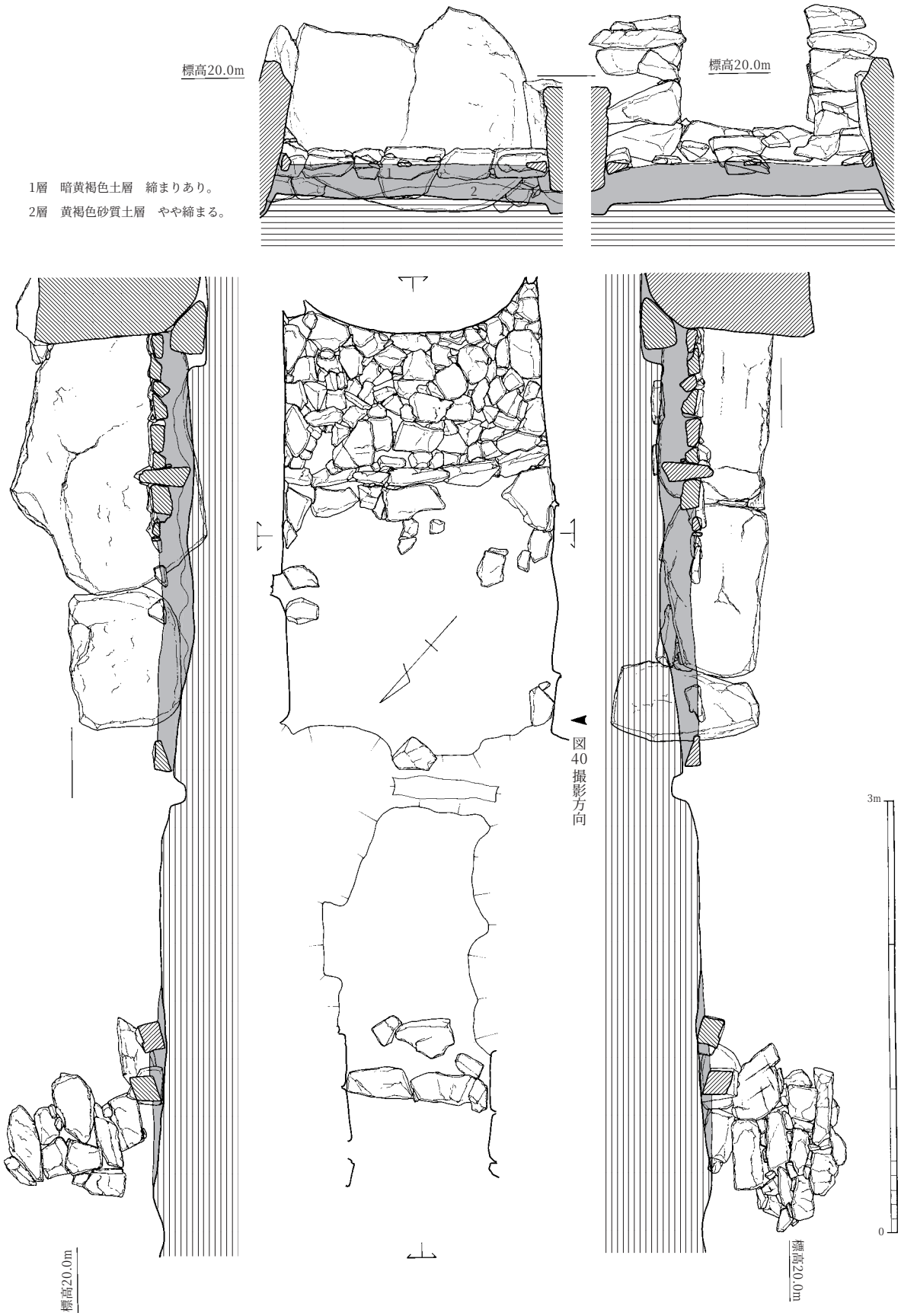
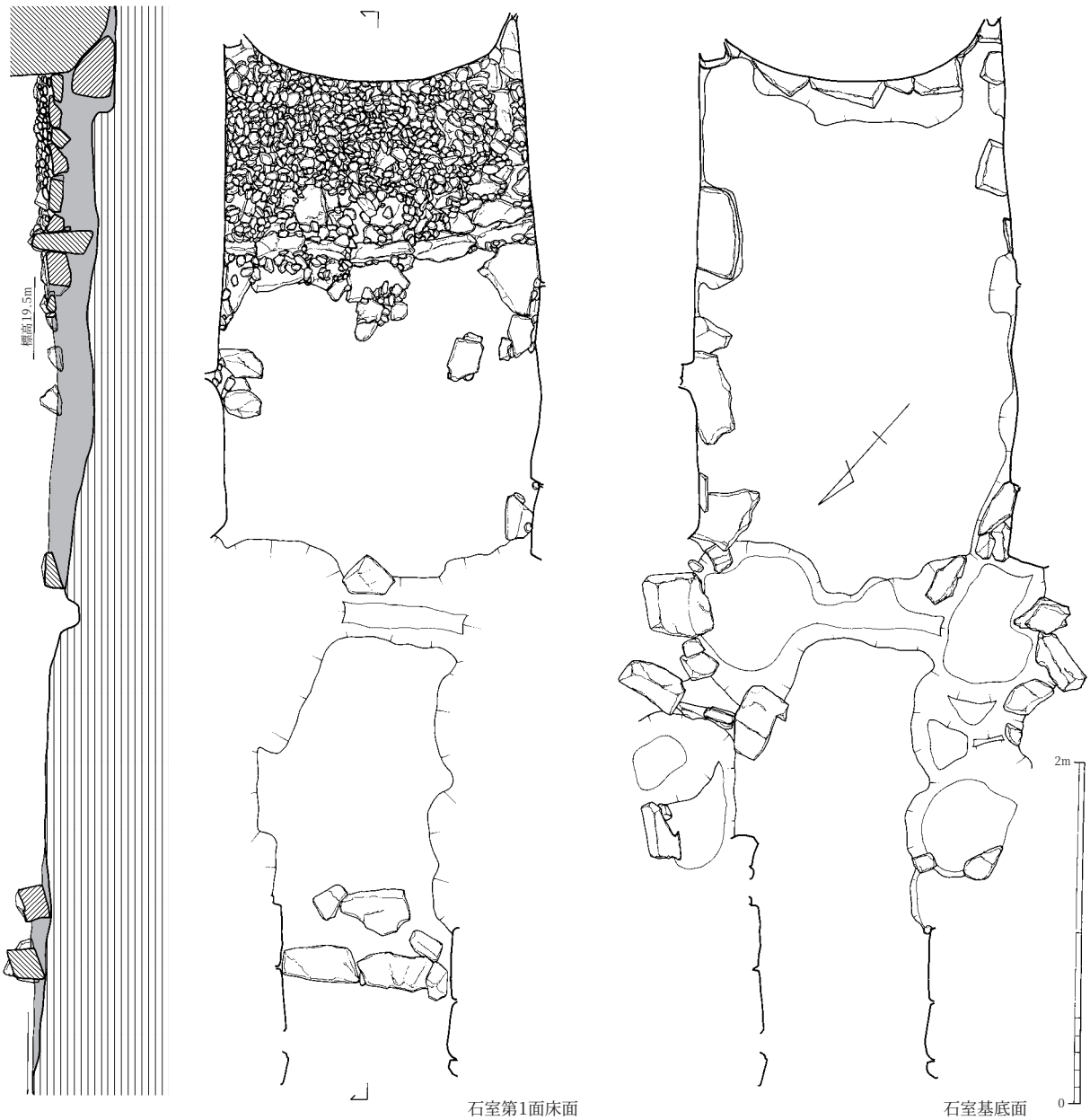


図32　石ヶ元2号墳石室実測図（縮尺1/40）

▲図34　石ヶ元2号墳石室第１面（北から）

▲図34　石ヶ元2号墳石室基底面の状況（北から）



▲図35　石ヶ元２号墳石室第1面および石室基底面の状況（縮尺1/40）

▲図36　石ヶ元2号墳石室奥壁（北から）

▲図37　石ヶ元2号墳石室屍床部（北から）

▲図38　石ヶ元2号墳羨道左側壁（西から）

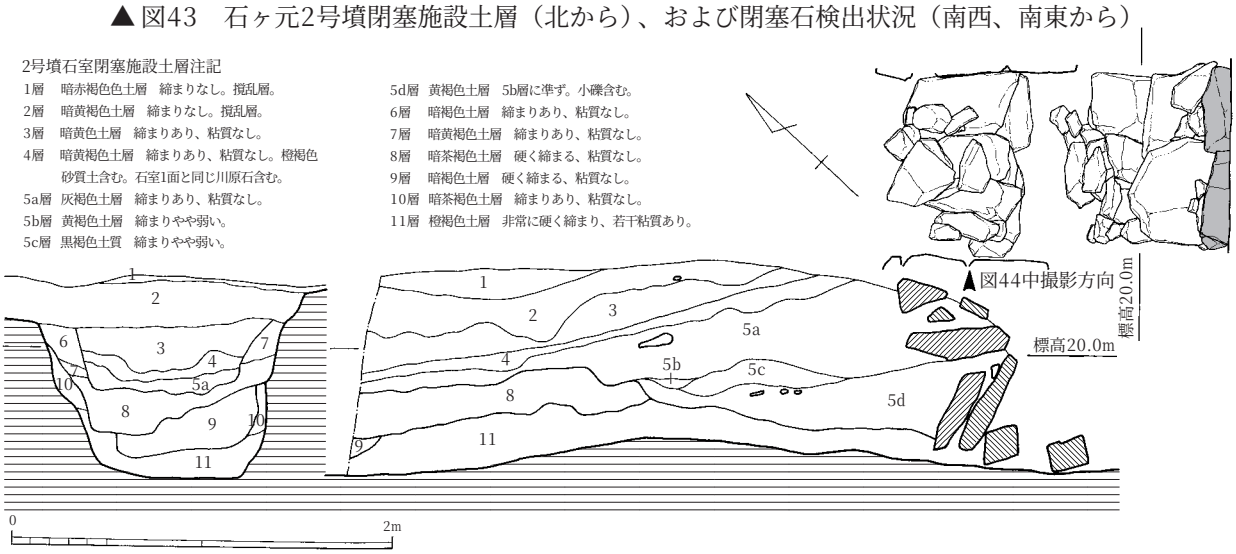
▲図39　石ヶ元2号墳玄室左側壁（西から）

▲図40　石ヶ元2号墳石室全景（南西から）

▲図41　石ヶ元2号墳玄室右側壁（北東から）

▲図42　石ヶ元2号墳羨道右側壁（北から）

▲図43　石ヶ元2号墳閉塞施設土層（北から）、および閉塞石検出状況（南西、南東から）



▲図44　石ヶ元2号墳閉塞施設実測図（縮尺1/40）

閉塞施設（図43、44）

羨道端部から墓道にかけて閉塞施設が構築される。閉塞施設は、玄室側の閉塞石とそれより墓道側の埋土から構成される。閉塞石は、長さ55～75cm、高さ50～55cm、厚さ10cm程度の扁平な板石２枚を、第一梱石を根石として、それぞれ重なるように羨道側壁間に立てられている。土層観察から、最後の追葬時には、この板石は外されていなかったと考えられる。板石の天端まで土砂を充填した後、更に扁平な石材を横位に３枚並べて平坦面を構築した後、小振りな礫を積み上げている。高さは約100cmが遺存している。

閉塞施設の埋土は、黄褐色や灰褐色土を用い、各層とも非常に硬く締まっている。主軸に沿った縦横の土層観察から、2号墳では少なくとも初葬を含めて４回の埋葬があったと推定される。各追葬に伴う埋土は図44に示した通り、初葬が10・11層、２回目の埋葬が9層、3回目の埋葬が６・７・８層、最終の埋葬が３・４・５層と考えられる。土層の切り合い関係から、ａからｄを含む５層の下線が最終埋葬に伴う墓道の掘方と考えられ、先にも若干触れたが、墓道掘削後に５ｂ～５ｄ層を埋めてなおして追葬時の墓道を整地した可能性が考えられる。また５ａ層は埋葬後の埋土と考えられ、これより上の閉塞石の積み方は下と大きく異なり、その積み上げと並行して埋土される。

（４）出土遺物（図45）

出土状況

石室床面からは、耳環や玉類など副葬品の出土は僅かである。遺物の総量はコンテナケース１箱にも満たず、石室の破壊や墳丘の削平によると考えられる。また、白磁や青磁の小片など、中世の遺物が比較的出土しており、2号墳の周辺が中世に何らかの形で利用された可能性がある。

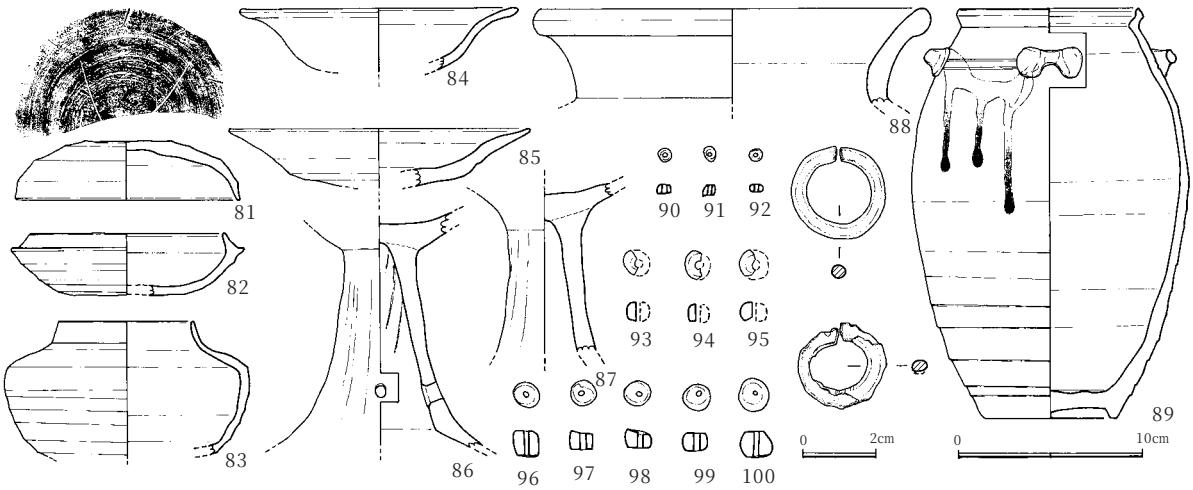


図45　石ヶ元2号墳出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）

遺　物（図45）

須恵器

器種は、坏（身、蓋）、小型壷、甕の口縁部片などがある。

坏　蓋（81）

81は口径12.2cm、器高3.3cmを測り、約半分が欠損する。天井部の約１/２に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号の一部が観察される。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

坏　身（82）

82は口径10.6cm、受部径12.8cm、器高3.3cmに復元される。底部の約１/２に回転ヘラ削りを施す。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

小型壷（83）

83は口径7.2cm、胴部最大径13.4cmに復元され、底部が欠損する。口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。胴部最大径は肩部付近に求められる。肩部以下、胴部には自然釉が付着するが、口縁部には認められず、色調が異なり、蓋をされた状態で焼成された痕跡が確認できる。胴部下半から底部には粗い回転ヘラ削りを施す。焼成は良好で、色調は明灰色を呈する。

甕（88）

88は口径21.0cmに復元される口縁部片である。口唇部は肥厚し、断面蒲鉾形を呈する。焼成は良好で、色調は紫がかった青灰色を呈する。

土師器

高　坏（84～87）

84、85は坏部片で、口径は順に15.2cm、16.4cmに復元される。84は墓道８層から出土した。86、87は脚部片で、86は下方に孔径0.6～0.8cmの小円形の透かしが穿孔される。いずれも全体に器面の磨滅が激しく、調整が確認できない。色調は鈍い橙褐色～冴えた橙褐色を呈する。

装身具

ガラス製玉類（90、91）

90、91は直径4mmを測る小玉で、色調は紺青色を呈する。引き伸ばし技法で製作される。

土製玉類（92～100）

いずれも小玉で、色調は暗灰色を呈する。

耳　環（101、102）

ともに銅芯が残るのみで、メッキの状況は不明である。101は短径2.5cm、長径2.6cm、内短径1.7cm、内長径1.8cm、断面径0.3cmを測る。102は腐食が激しく、法量を明確にできないが、概ね短径2.4cm、長径2.6cm、断面径0.4cm程度と推定される。玄室床面から出土している。

灰釉陶器

四耳壷（89）

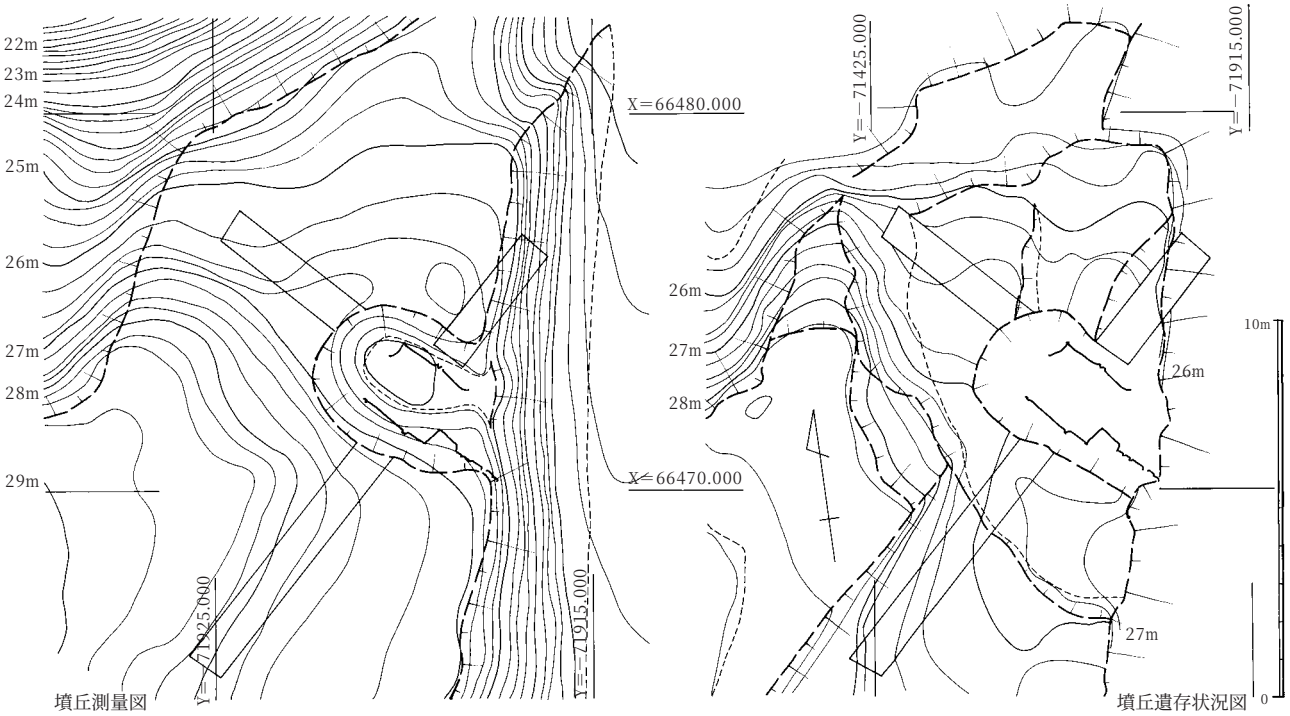
口径10.2cm、器高22.3cm、底径7.2cm、胴部最大径15.2cmを測る。胴部下半には粗雑な回転ヘラ削りが施される。肩部には２条の沈線が巡り４ヶ所に耳が付けられ、釉薬が掛け付けられる。口縁部は「く」の字状に外反する。内側には砂目が数ヶ所に残る。底部は上げ底で、高台は逆台形を呈する。胎土は精緻、焼成は良好である。

４．石ヶ元３号墳

（1）位置と現況（図46右）

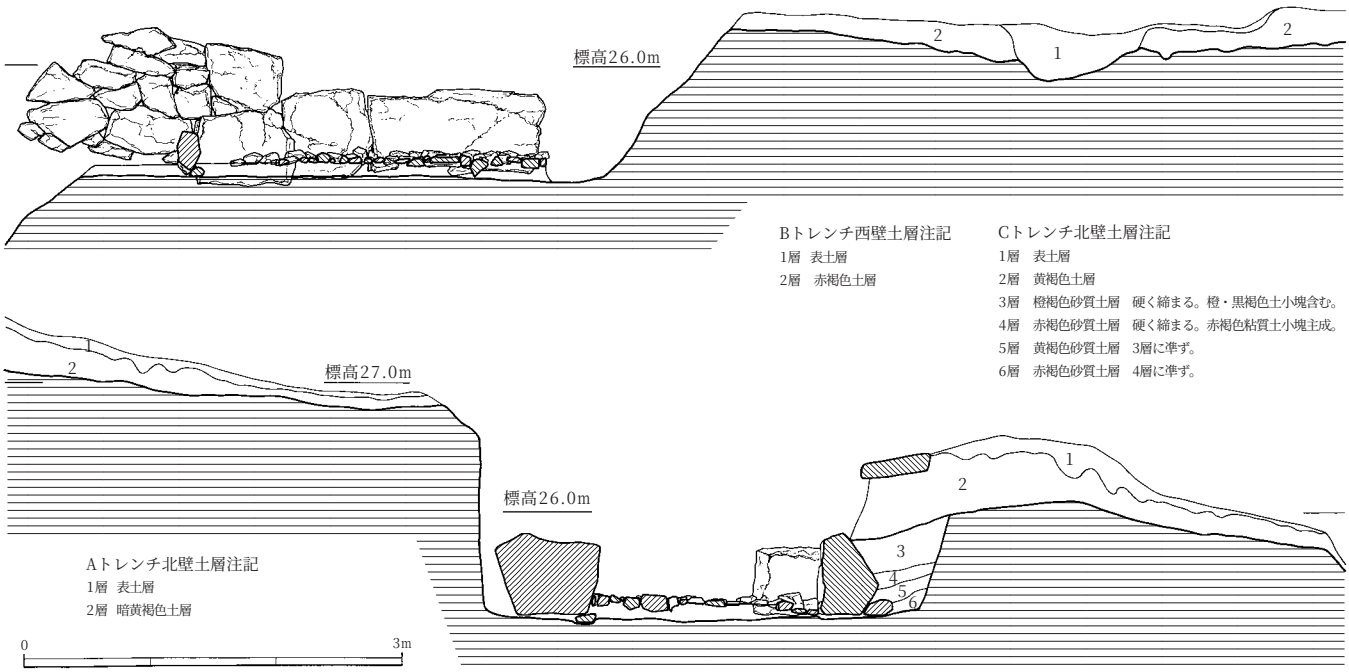
石ヶ元３号墳は、２号墳南西側の尾根上に位置し、3号墳から更に南西に４号墳が位置する。中心間でそれぞれ約25m離れている。

調査前の現況は山林で、標高30mを測った。内部主体付近が大きく陥没しており、石材が抜き取られていることが予想された。また３号墳が位置する尾根の東と北西側は、大きく削平されており断崖状を呈していた。また、墳丘自体も戦後の果樹園造成で大きく雛壇状に削平されていた。



▲図46　石ヶ元３号墳墳丘測量図および墳丘遺存状況図（縮尺1/200）

▲図47　石ヶ元3号墳全景（南東から）



▲図48　石ヶ元3号墳墳丘断面図（縮尺1/60）

▲図49　石ヶ元3号墳墳丘断面（南東から）

（2）墳　丘（図46～49）

周辺地形の削平が激しく、墳丘盛土は完全に削平されていた。また石室の北側には、盗掘坑が確認された。石室掘方の一部を除き、墳丘基底面および馬蹄形溝や墳裾も全く遺存しておらず、墳丘規模や構造などは全く不明である。

石室掘方

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ平行に掘削されたと推定される。掘方の上面が削平され、また羨道前半から墓道にかけては完全に失われており、全体の規模や構造が明確でない。遺存する部分から復元して、羨道部が窄まる隅丸長方形もしくは正方形を呈していたと推定される。掘削は、ほぼ垂直に行われ、深さは1.6m以上であったと考えられる。また基底面の状況から、基底部の幅は3.5mを測り、長さは約４mが遺存する。石室の裏込は、橙褐色や赤褐色の粘質土ブロックを多く含んだ黄褐色砂質土層や、砂質土を含む赤褐色粘質土層が互層状をなし、版築状に硬く叩き締められている。

（3）内部主体（巻頭図版２、図50～55）

３号墳の内部主体は、北東側に向かって開口する両袖式単室の横穴式石室である。玄室主軸はN－44°－Wである。

玄　室

右玄門の石材が抜き取られ、奥壁は右側壁側の１石が残るのみである。遺存する石材から玄室規模は、奥幅180cm、前幅180cm、右側壁長211cm、左側壁長186cmと推定される正方形に近い長方形平面を呈する。玄室に遺存する石材は全て玄武岩であり、羨道部は玄武岩と花崗岩を使用している。玄武岩を多用する石室は、桑原石ヶ元古墳群中、本３号墳のみであり、特殊性が窺える。

奥壁は、右側壁側の１石が遺存するのみで、長さ・幅・高さがいずれも50cm程度である。右側壁に挟まれるように配される。この他の奥壁は、基底面が撹乱されており、何石を配していたか明確にできない。

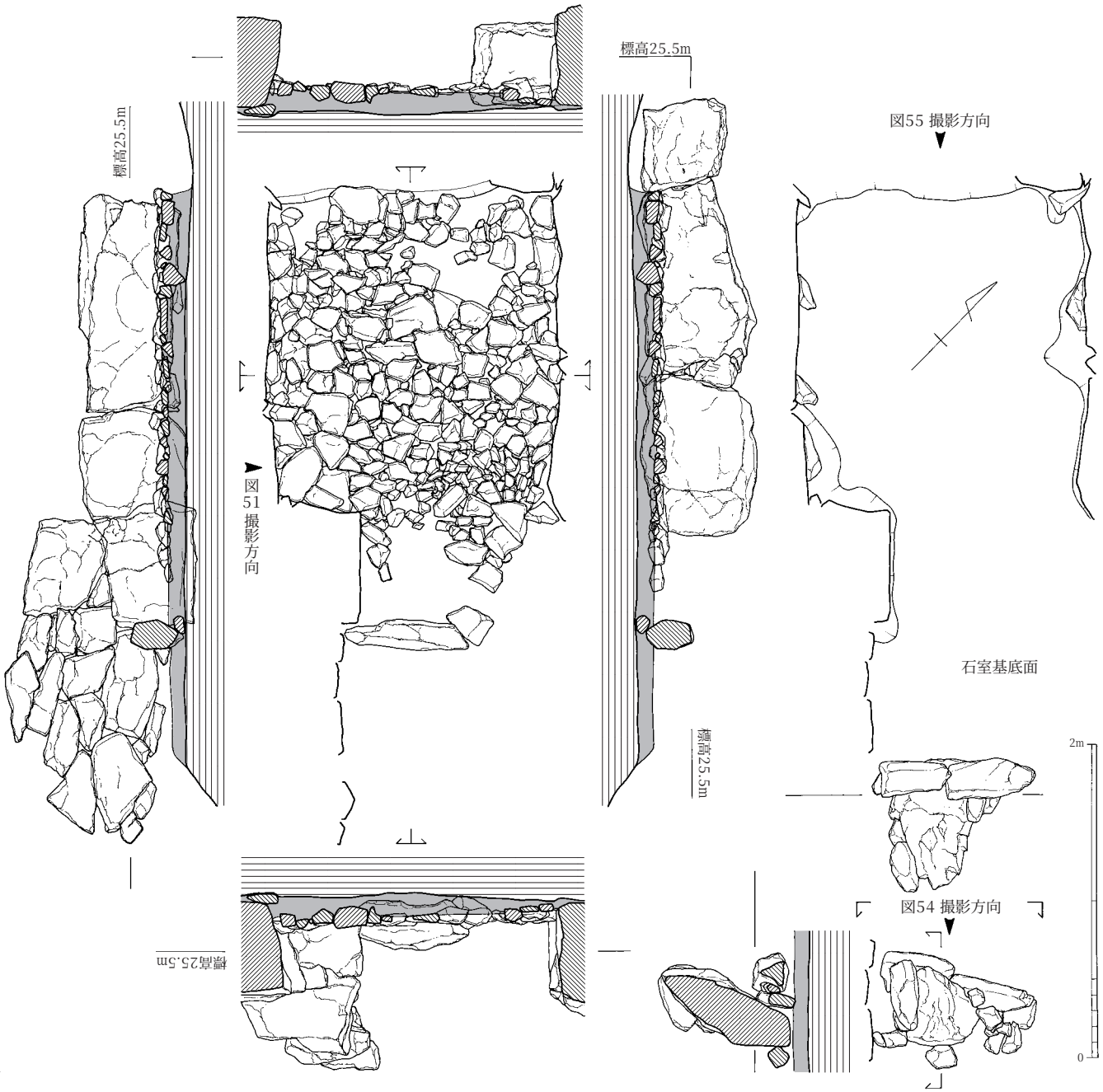


図50　石ヶ元3号墳石室実測図（縮尺1/40）

▲図51　石ヶ元3号墳石室全景（南西から）

▲図52　石ヶ元3号墳石室左側壁（北から）

▲図53　石ヶ元3号墳石室遺物出土状況（北西から）

▲図54　石ヶ元3号墳閉塞石（北西から）

▲図55　石ヶ元3号墳石室基底面の状況（北西から）

左側壁は、２石を用いて腰石としている。奥壁側の石材が大きく、玄門側の石材はその１/２程度である。奥壁側の石材は、長さ140cm×高さ50～60cm×厚さ55～80cmを測り、遺存する石材の中で最大である。横位に寝かせて使用している。玄門側の石材は、長さ70cm×高さ60～70cmを測る。いずれの石材も平坦面を天端に向け、目地が揃えられている。

右側壁も、２石を用いて腰石としている。奥壁側の石材が大きく、長さ100～150cm×高さ50～70cmを測り、横位に立てて使用している。玄門側の石材はやや小さく、長さ100cm×高さ70cmを測り、横位に据えて使用している。右側壁の両石材及び奥壁側石材と奥壁は、高さが揃えられ、天端の目地が通っている。

玄門部は両袖だが、右袖石が抜き取られている。左袖幅は52cmを測る。玄門部は２段目までが遺存し、石材は玄武岩である。腰石は、長さ80cm×高さ60cmを測り、横位に使用している。2段目の石材は長さ70cm×高さ40～45cm×厚さ60cmを測り、長辺が腰石と直行するように積まれている。玄門幅は、石材の抜き取り痕から105cm程度と推定される。

床面には敷石が敷設され、１面を確認した。使用される石材は、長さ５～35cm程度の扁平な玄武岩と花崗岩で、後者の使用が多い。奥壁側の一部と玄門付近が、撹乱されて遺存していない。敷石は、石室基底面の上に暗赤褐色土を10cm程度盛った上に敷設されている。

羨　道

羨道は右側壁が完全に失われ、左側壁も墓道側が欠け、規模が判然としない。左側壁は長さ212cmが遺存し、使用される石材は大きいもので長さ65cm程度と全体に小振りである。石材は横位に積まれており、最高４段程度が遺存している。また、斜め方向に目路が通り、羨道腰石と玄門腰石が、羨道４段目と玄門２段目の高さが揃う。

床面には、１か所に梱石が敷設されている。梱石は、長さ80cmの棒状の花崗岩と小礫１石からなる。左袖石の墓道側端部に梱石の端部が置かれ、また羨道腰石は、玄門より10cm程度控えて配されている。奥壁の抜き取り痕から梱石までの距離は、224cmを測る。

閉塞施設（図50、54）

梱石より墓道側に閉塞石の一部が遺存していた。これより墓道側の閉塞施設は完全に失われており、追葬の回数など不明である。

閉塞石は梱石より墓道側に、長さ45～55cmの棒状の石材を２石並べ根石とし、これに高さ90cm×幅50cm×厚さ30cmの扁平な玄武岩を立てている。羨道側壁との間隙には小礫が充填されている。

梱石より墓道側には敷石が確認されず、直接地山となっている。

石室基底面の状況（図50右、55）

敷石とその埋土を完全に除去して観察した。腰石周壁に沿って、その安定を図るための掘り込みが巡っているが、深さは床面から5cm弱と非常に浅い。これは、石材の平坦面を下面に利用しており、既に安定性が確保されているからと考えられる。また腰石と地山の間には、20～50cmの礫を用いた根石が配されるが、数量は少なく、石材の転倒防止を意図したものと考えられる。

（４）出土遺物（図53、56）

出土状況（図53、56上）

石室床面の副葬品を中心に遺物が出土した。

確認された石室の副葬品は須恵器のみであり、盗掘や石室の破壊などで多くが失われていると推測される。須恵器類は、玄門間や玄室左側壁際から出土した。これらの遺物は、最後の追葬段階で副葬されたものと考えられ、この時の元位置を保っていると推定される。

遺物の総量は、コンテナケース２箱分である。

遺　物（図56）

須恵器

器種は、坏（身、蓋）、短頸壺、平瓶などがある。

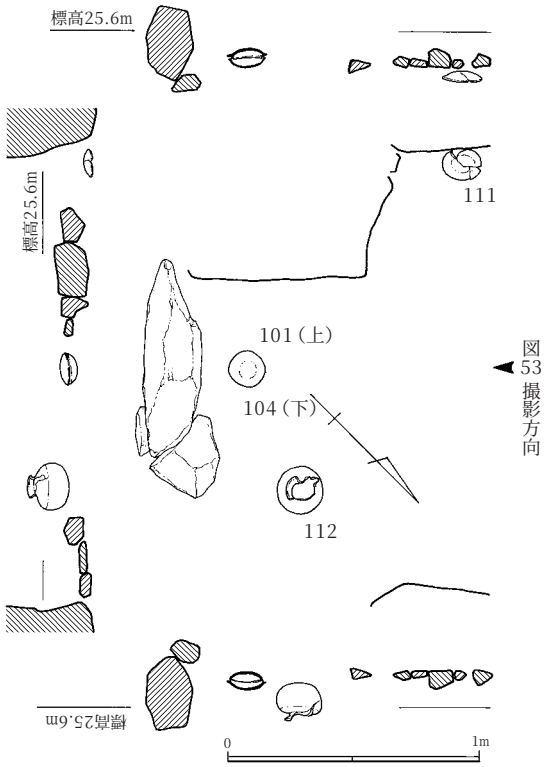
坏　蓋（103～105、109）

103は口径11.9cm、器高4.1cmを測る。天井部の約１/２に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号がある。焼成は堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。104

は口径12.8cm、器高3.6cmを測る。天井部の約１/２に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号がある。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈すが、天井部のみ焼成がややあまく、重ね焼きの痕跡と推測される。105は口径12.8cm、器高3.7cmを測る。天井部の約１/２に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号がある。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。トレンチから出土した。109は口径14.2cm、器高3.8cmに復元される。天井部の約１/２に回転ヘラ削りを施す。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。

坏　身（106～108、110～113）

106は口径10.5cm、受部径12.8cm、器高3.3cmを測る。底部の約１/２に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号がある。口縁部は短く内傾する。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。107は口径11.0cm、受部径13.4cm、器高3.9cmを測る。底部の約１/２に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号がある。口縁部は短く内傾する。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。108は口径11.0cm、受部径13.4cm、



石室内遺物出土状況

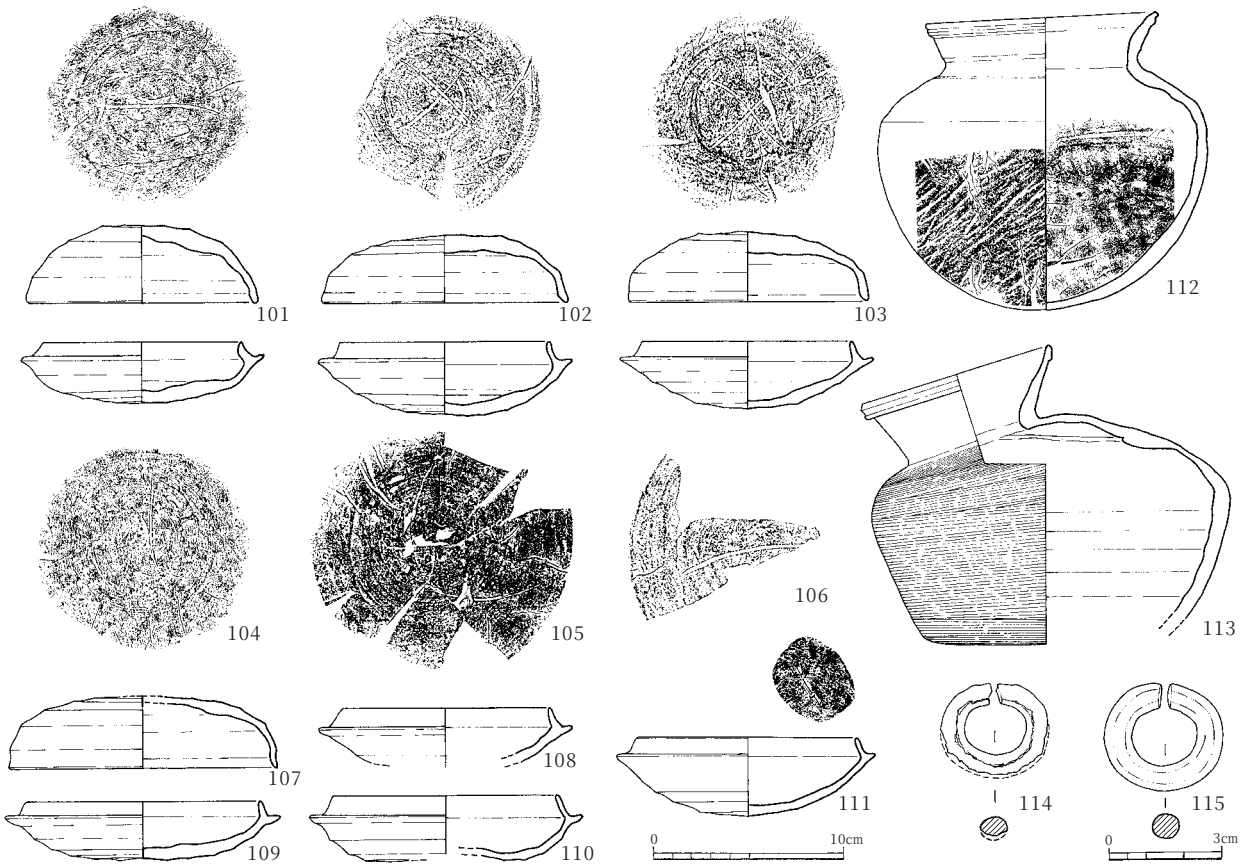


図56　石ヶ元3号墳石室遺物出土状況および出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、1/2）

器高3.6cmに復元される。底部の約１/２に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号がある。口縁部は短く内傾する。焼成は良好で、色調は明青灰色を呈する。110は口径12.4cm、受部径14.6cm、器高3.0cmに復元される。底部の約１/２に回転ヘラ削りを施す。口縁部は短く内傾する。焼成はあまく、色調は淡灰白色を呈する。111は口径11.0cm、受部径13.7に復元される。口縁部は短く内傾する。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。112は口径11.8cm、受部径14.4に復元される。底部には回転ヘラ削りを施し、器形が歪んでいる。口縁部は短く内傾する。焼成は概ね良好で、色調は暗灰色を呈する。113は口径11.5cm、受部径13.3cm、器高4.2cmを測る。底部の約１/２に回転ヘラ削りを施す。内器面にヘラ記号がある。口縁部は短く内傾する。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

短頸壷（114）

114は口径11.8cm、器高15.5cm、頸部径10.2cm、胴部最大径17.5cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、端部には浅い凹線が巡る。肩部はなだらかで、胴部最大径は肩部付近に求められる。胴部下半は球形に近く、外器面には平行叩きが施される。内器面の当て具痕はナデ消されており、内・外器面上半には横ナデが施される。焼成は堅緻で、色調はやや黄色がかった暗青灰色を呈する。

平　瓶（115）

115は胴部最大径19.0cm、口縁部径10.5cm、器高15.8cmを測る。底部は平底で、底径13cmに復元される。底部及び胴部外器面にはカキ目を施す。焼成は堅緻で、色調は灰黒色を呈する。

装身具

耳　環（116、117）

２点共にトレンチから出土しており、石室破壊もしくは盗掘時に掻き出されたものと推定される。116は銅芯銀張（銀板張か）製で、短径2.4cm、長径2.8cm、内短径1.3cm、内長径1.6cm、環断面径0.6～0.75cmを測る。銀板は内側に残るのみで、破損が大きい。115は銅芯銀張製で、短径2.85cm、長径3.1cm、内短径1.5cm、内長径1.7cm、断面径0.65～0.7cmを測る。

５．石ヶ元10号墳

（１）位置と現況

石ヶ元10号墳は、石ヶ元3号墳の南南西に位置し、石室中心間の距離で約30m離れている。

調査前の現況は果樹園で、周辺の地形は雛壇状に開削されていた。調査着手前、古墳が存在すると想定されておらず、表土及び流土の除去中に検出された。10号墳の呼称は、平成７年度の踏査の段階で、石ヶ元9号墳の南側に隣接する尾根上に想定されていたが、調査の結果、古墳でないことが判明し空番となっていたが、今回の調査で数を埋める目的で10番を使用した。

（２）墳　丘（図９）

地山整形と盛土による墳丘が存在したと推定されるが、周辺地形の削平が激しく、盛土は完全に削平されていた。また、石室掘方の一部を除き、墳丘基底面および周溝や墳裾も遺存していない。墳丘規模や構造などは、全く不明である。

石室掘方

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ垂直に掘削されたと推定される。削平により全体の規模や状況が明確でないが、長さ1.28m、最大幅0.87mを測る隅丸長方形を呈している。内部主体の石材の形状に合わせて部分的に広く掘削される箇所があり、やや不整形である。石室の裏込は、橙褐色粘質土で充填されている。

（３）内部主体（図57右下～63）

1号墳の内部主体は竪穴式石室で、玄室主軸はN－39°－Wを測る。天井部が失われ、腰石から２段目の一部が遺存するのみである。使用される石材は全て花崗岩である。南北の小口には、長さ40cm×高さ30cm×厚さ10～15cm程度の扁平な石材を立てて使用している。東西の側壁は２石を用い、石材の大きさは小口と同様である。北側小口の２段目は、小口と側壁に掛かるよう斜め方向に横位に積まれ持ち送られる。

床面には５～30cm程度の扁平な石材で敷石が敷設される。また南側の小口には、壁石に沿って長さ35cmの棒状の石材が床面より10cm弱高く

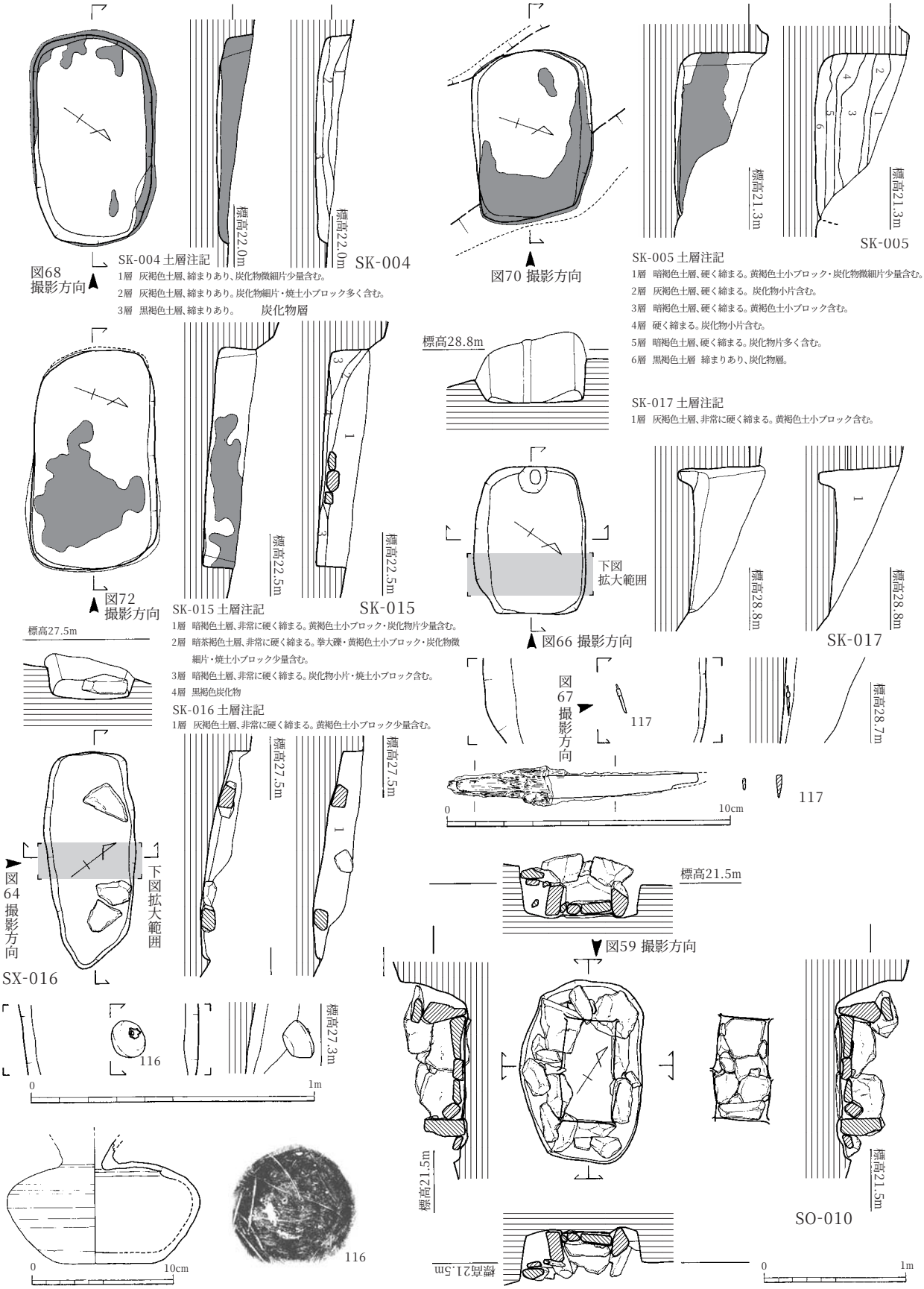


図57　その他の遺構、遺物出土状況および出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4、1/2）

▲図58　SO-010石室床面（東から）

▲図59　SO-010石室および掘方（南から）

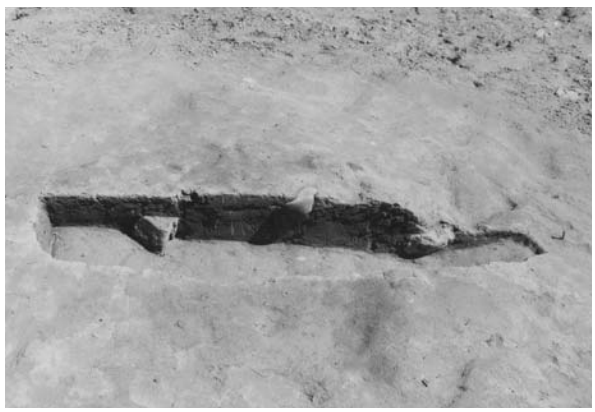
▲図60　SO-010石室北小口（南から）

▲図61　SO-010石室南小口（北から）

▲図62　SO-010石室西側壁（東から）

▲図63　SO-010石室東側壁（西から）

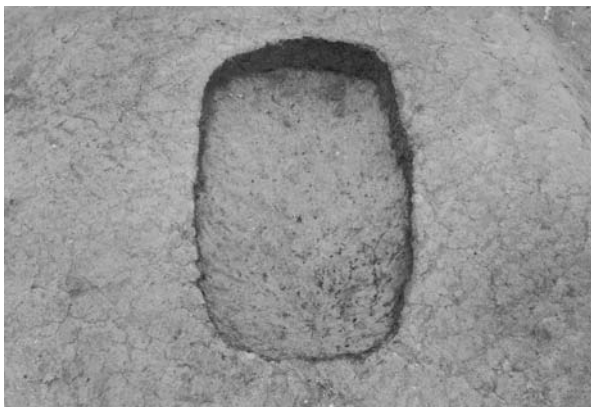
▲図64　SX-016土坑墓全景（南西から）



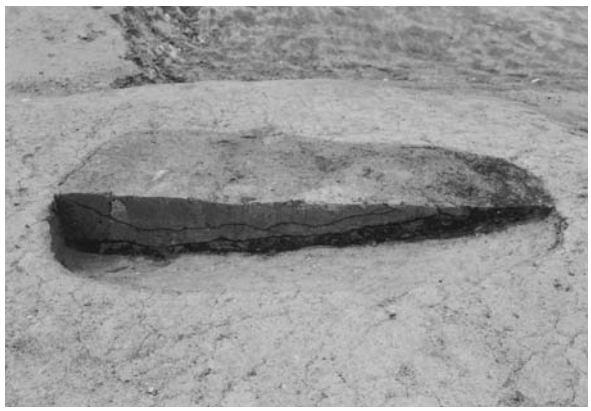
▲図65　SX-016土坑墓土層断面（南西から）

▲図66　SX-017土坑墓全景（北東から）

▲図67　SX-017土坑墓遺物出土状況（東から）



▲図68　SK-004焼土坑全景（北東から）



▲図69　SK-004焼土坑土層断面（南東から）

▲図70　SK-005焼土坑全景（東から）

▲図71　SK-005焼土坑土層断面（東から）

▲図72　SK-015焼土坑全景（北東から）

▲図73　SK-015焼土坑土層断面（北東から）

置かれている。石室基底面と敷石との間には、橙褐色粘質土が薄く盛られている。

石室基底面の状況

石室基底面は、腰石に沿ってその安定を図るため僅かな掘り込みが巡る。また腰石裏側に根石と、裏込中に控え積み的な小礫が数個確認された。

出土遺物は確認されなかった。

６．土坑墓

（１）SR－016（図57左下、64、65）

SR－016は、石ヶ元3号墳の南南西に位置し、石室中心間の距離で約30m離れている。土坑の掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ垂直に掘削されたと推定される。

削平により全体の規模や状況が明確でないが、長さ1.20m、最大幅0.63mを測る隅丸長方形を呈している。東側小口の形状は歪であるが、削平によるものであろうか。基底面は丘陵の傾斜に従って20cm程度の比高差がある。

床面には20～30cm程度の小礫が６個敷かれていたが、誤って内南半の３個を図化する前に取り上げてしまった。礫は平坦面を上に向けており、屍床を構築したものと考えられる。

礫敷上面付近から、副葬品の須恵器平瓶が１点出土した。118は胴部最大径13.6cm、底径6.6cmを測る。口縁部は、丘陵の削平時に欠損したものと推測される。底部は平底で、ヘラ記号がある。胴部下半から底部にかけて回転ヘラ削りを施す。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

（２）SR－017（図57右中、66、67）

SR－017は、石ヶ元3号墳の南南西に位置し、石室中心間の距離で約30m離れている。土坑の掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ垂直に掘削されたと推定される。また掘り込みはほぼ垂直に行われている。

削平により全体の規模や状況が明確でないが、長さ1.03m、幅0.78mを測る隅丸長方形を呈している。掘方の基底面はほぼ水平である。

西側小口の床面から、直径20cm程度のピットが検出された。床面からの深さは10cm程度であるが、性格は不明である。

床面直上から、副葬品の刀子が１点出土した。119は切先が欠損している。残存長8.9cm、刀身元幅0.8cm、刀身厚0.2cm、茎厚0.2cm、尻幅0.5cmを測る。栗尻で柄の木質が僅かに遺存する。

７．焼土坑

（１）SK－004（図57左上、68、69）

SK－004は、石ヶ元２号墳の南約30mに位置する。土坑の掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ垂直に掘削されたと推定される。平面は長さ148cm×幅83cmを測る隅丸長方形を呈する。基底面はほぼ水平で、掘り込みはほぼ垂直に行われる。覆土は３層に分層でき、最下層は炭化物層である。壁面を中心に焼土化している。

覆土から、糸切土師器皿の小片が出土しており、13世紀後半以降の所産と考えられる。

（２）SK－005（図57右上、70、71）

SK－005は、石ヶ元２号墳の南約30mに位置する。土坑の掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ垂直に掘削されたと推定される。平面は長さ121cm×幅83cmを測る隅丸長方形を呈する。基底面はほぼ水平で、掘り込みはほぼ垂直に行われる。覆土は６層に分層でき、各層には炭化物の細片が含まれ、最下層は炭化物層である。床面の東半と壁面を中心に焼土化している。

覆土からの出土遺物は、確認されなかった。

（３）SK－015（図57左中、72、73）

SK－005は、石ヶ元２号墳の南約30mに位置する。土坑の掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ垂直に掘削されたと推定される。平面は長さ154cm×幅88cmを測る隅丸長方形を呈する。基底面は丘陵の傾斜に従って10cm程度の比高差があり、掘り込みはほぼ垂直に行われる。覆土は４層に分層でき、各層には炭化物の細片が含まれ、最下層は炭化物層である。２層中には礫３個を含む。床面と壁面を中心に焼土化している。

覆土からの出土遺物は、確認されなかった。

3区の調査

1．調査の概要

３区は、西区大字桑原字別所地内に位置し、調査前の現況は畑であった。調査面積は　㎡で、調査期間は平成12年4月4日から同年10月20日である。調査区の南端部には桑原古墳群A－１号墳が立地する。また、調査区のほぼ中央で古墳を想定したトレンチ調査を行ったが、古墳は確認されなかった。しかし、図88に示したように、須恵器など古墳時代の遺物が少なからず出土しており、また地山整形らしき地形が観察されることから古墳が存在した可能性がある。そのほか検出した遺構の内容は、ピットや近世の所産と考えられる溝などである。調査面積は1,047㎡である。出土遺物の総量は、コンテナケース４箱分である。

2．桑原古墳群A－１号墳

（1）位置と現況（図76左上）

桑原古墳群A1号墳は、同古墳群の内、最も西側に位置する。周辺地形は開削が激しいが、尾根の端部に立地していたと推定される。また、西隣の２号墳との比高差が約18mもあり、尾根の傾斜は急峻である。

調査前の現況は、畑の休耕地であった。石室石材が露出しており、道路の開削によって墳丘は大きく削平されていた。

（2）墳　丘（図76）

周辺地形の削平が激しく、墳丘盛土は完全に削平されていた。また、石室掘方の一部を除き、墳丘基底面および周溝や墳裾も全く遺存していない。

墳丘規模や構造などは、全く不明である。

石室掘方

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ平行に掘削されたと推定される。削平により全体の規模や状況が明確でないが、羨道部が窄まる隅丸方形もしくは長方形を呈していたと推定される。

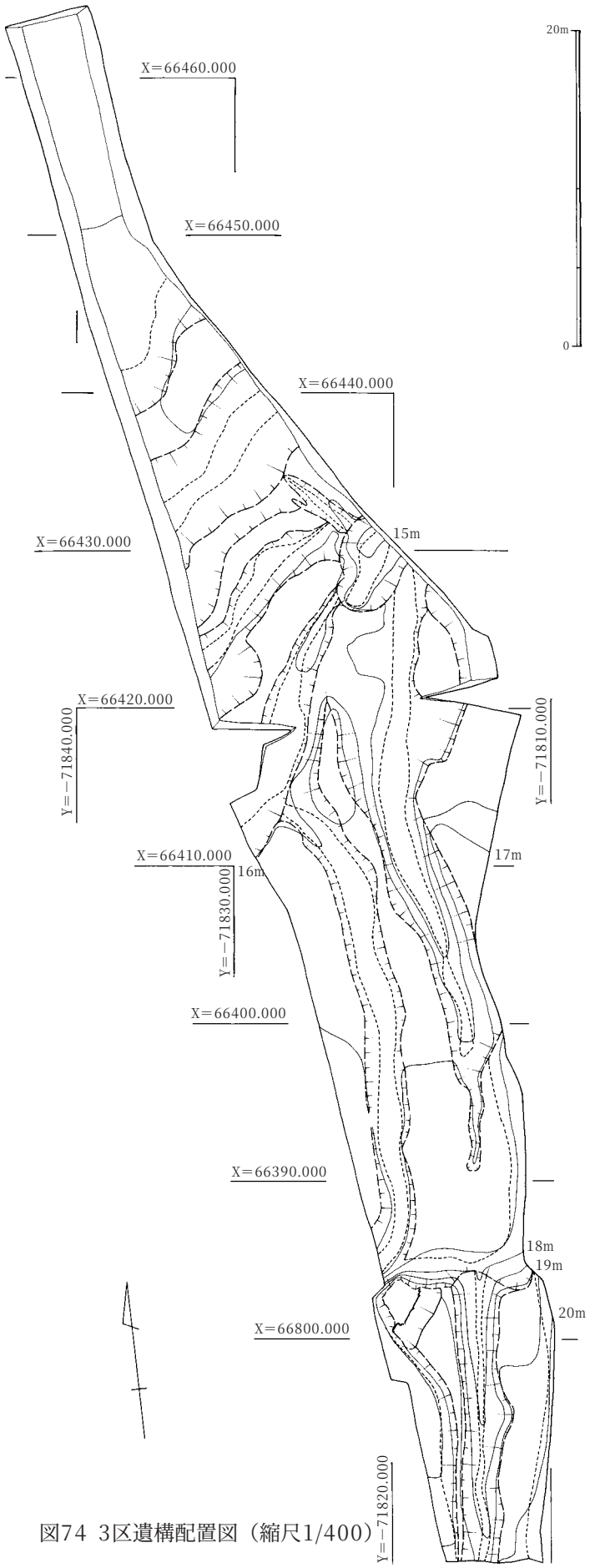
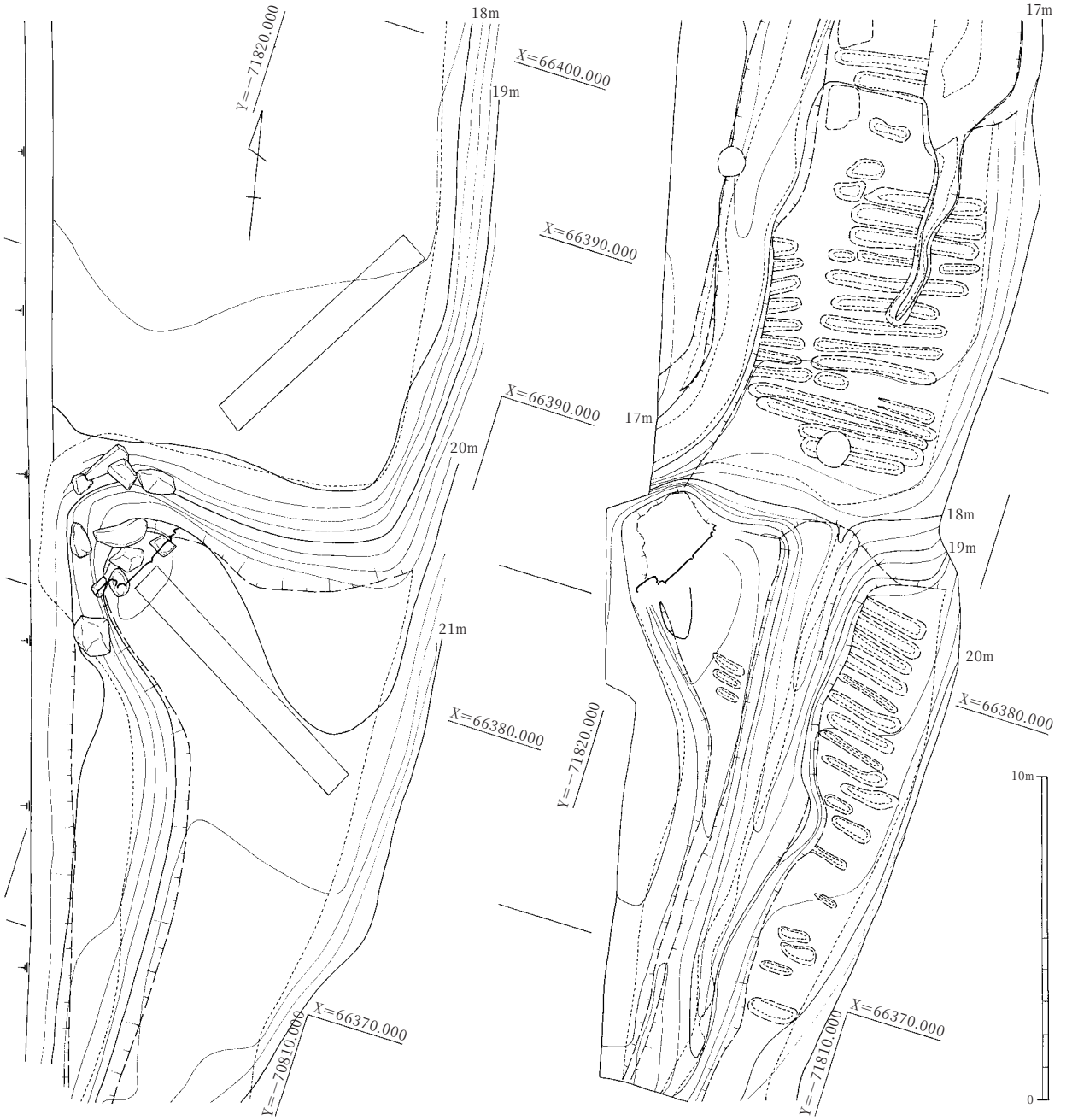
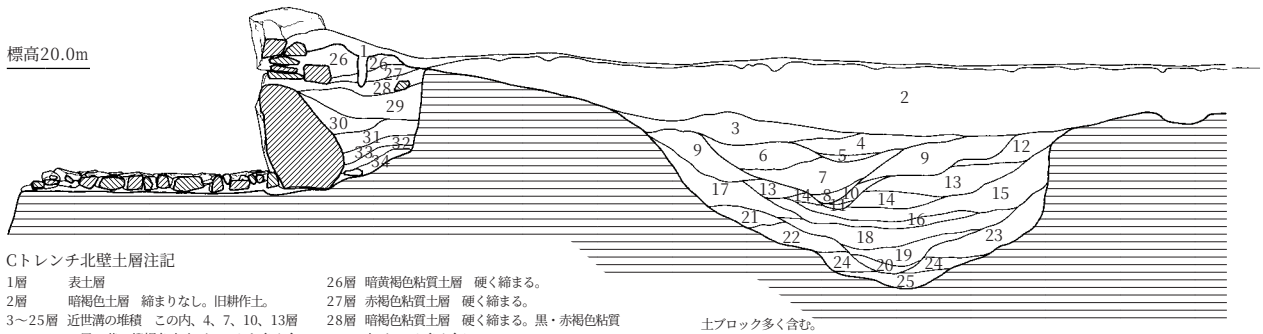


図74 3区遺構配置図（縮尺1/400）





Cトレンチ北壁土層注記

1層　表土層
2層　暗褐色土層　締まりなし。旧耕作土。
3～25層　近世溝の堆積　この内、4、7、10、13層は黒・黄・橙褐色土小ブロックを多く含む暗褐色～暗茶褐色粘質土層で、人為的埋土か。また、5、8、12、14、15、16、18、19、20、25層は粗砂主成の暗～明灰黄褐色砂質土層で、水性堆積層。
26層　暗黄褐色粘質土層　硬く締まる。
27層　赤褐色粘質土層　硬く締まる。
28層　暗褐色粘質土層　硬く締まる。黒・赤褐色粘質土ブロック多く含む。
29層　明橙褐色粘質土層　硬く締まる。黄褐色粘質土ブロック多く含む。
30層　黄褐色粘質土層　硬く締まる。
31層　灰褐色粘質土層　硬く締まる。黒・赤褐色粘質土ブロック多く含む。
32層　黄褐色粘質土層　硬く締まる。灰・赤褐色粘質土ブロック含む。
33層　橙褐色粘質土層　硬く締まる。
34層　黄褐色砂質土層　硬く締まる。
26～34層：石室裏込

0　2m

図75　桑原A－1号墳墳丘測量図、墳丘遺存状況図および墳丘断面図（縮尺1/200、1/60）

また基底面の状況から、基底部の幅は４m程度であったと考えられる。石室掘方と石室石材との間の裏込は、黄褐色砂質土や橙褐色粘質土を用いて版築状に充填されている。

（３）内部主体（図77～86）

1号墳の内部主体は、南西側に向かって開口する両袖式単室の横穴式石室と推定される。玄室主軸はN－41°－Eである。奥壁及び左側壁が完全に破壊されている。

玄　室

玄室は、右側壁の腰石と2段目の一部が残るのみで、規模は判然としない。腰石の最奥部に充填された石材が、玄室主軸に対して斜め方向に配されていることから、隅角の石材と考えられ、このことから右側壁長は215cmと考えられる。腰石は２石からなり、玄室側から順に長さ100cm×高さ140ｃm、長さ140cm×高さ100ｃm程度の大振りな花崗岩転石を立てて使用している。

床面には、5～40cm程度の小礫で敷石が敷設されている。３面のみ確認したが、羨道側を中心に大きく削平されている。また、石室基底面（地山）と敷石との間には、黄褐色砂質土が幅５cm程度充填されている。玄室の幅は不明である。

第１面の敷石は、標高約19.35mで検出した。玄室前半に礫を敷き詰め、後半にはほぼ等間隔に礫が高さをほぼ揃えて検出された。

第２面の敷石は、第１面の敷石を除去した標高約19.25mで検出した。１面と同様、玄室前半に幅50cm×長さ100cm程度の長方形状に礫を敷き詰め、後半にはほぼ等間隔に礫が高さをほぼ揃えて検出された。このことから、１面、2面共に玄室後半が棺台であると推定される。

第３面の敷石は、第２面の敷石を除去した標高約19.20mで検出した。玄室全面にほぼ水平に礫を敷き詰めている。

玄門部は、床面の形状から両袖であったと推測されるが、明確にできない。左袖幅は33cmを測る。腰石は、幅80cm×高さ140cmの花崗岩転石を立てて使用している。

羨道および閉塞施設は全く遺存しない。

（４）出土遺物（図85～87）

出土状況（図14下、20～23）

石室床面の副葬品を中心に、墳丘周辺から遺物が出土した。石室の副葬品には、須恵器のほか鉄製武具や工具、装身具などがある。うち須恵器平瓶（123）は玄室右隅角付近に副葬されていた。また鉄鏃数本も玄室右側壁側から出土している（図85参照）。また、刀子と耳環が第１面の玄室後半部から出土したが、先に記述したように棺内に副葬されていたものが、棺の腐朽とともに転落したものの可能性が考えられる。

１号墳出土の遺物総量は、コンテナケース　箱分である。

遺　物（図87）

須恵器

器種には、坏蓋、高坏、蓋、平瓶、提瓶、壷、甕などがある。

蓋（118）

118は口径11.0cm、器高4.2cmを測る完形品である。天井部約1/2に回転ヘラ削りが施され、やや深い環状の摘みが付く。

坏　蓋（119）

119は受部径12.6cmに復元される。天井部約1/2に回転ヘラ削りが施される。焼成良好で、色調は暗灰色を呈する。

壷（120）

120は口径5.6cmに復元される小壷の口縁部片である。口縁部は短く内傾気味に立ち上がる。胴部以下にはカキ目を施す。焼成良好で、色調は灰褐色を呈する。

高　坏（121）

121は口径10.2cm、底径7.0cm、器高9.5cmに復元される。坏部下半にカキ目が施される。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

甕（122）

122は甕の頸部から肩部にかけての小片である。内器面に青海波の当て具痕がみられる。

提　瓶（126、127）

126は提瓶の頸部片と考えられ、口径6.0cmを測る。127は胴部の小片で、回転カキ目を施す。

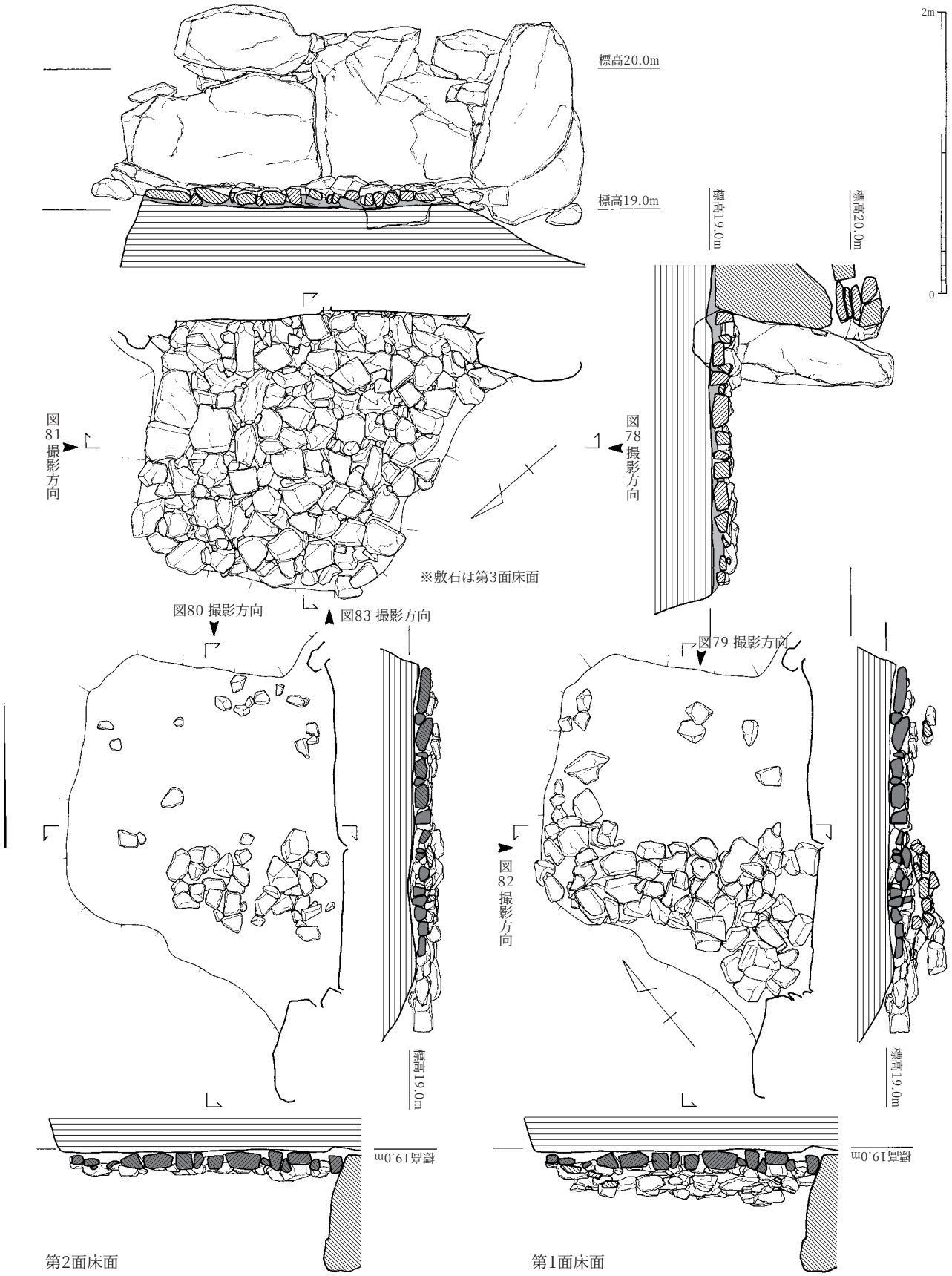


図76　桑原A-1号墳石室実測図（縮尺1/40）

▲図77　A-1号墳全景（北から）

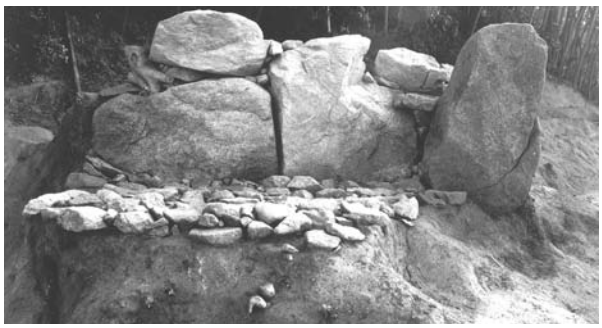
▲図78　A-1号墳石室全景（南西から）

▲図79　A-1号墳石室第1面

▲図80　A-1号墳石室第2面

▲図81　A-1号墳石室第3面（北東から）

▲図82　A-1号墳石室第1面断面（北西から）



▲図83　A-1号墳石室第3面と右側壁（北西から）

▲図84　A-1号墳石室鉄鏃出土状況（北西から）

▲図85　A-1号墳刀子・耳環出土状況（北から）

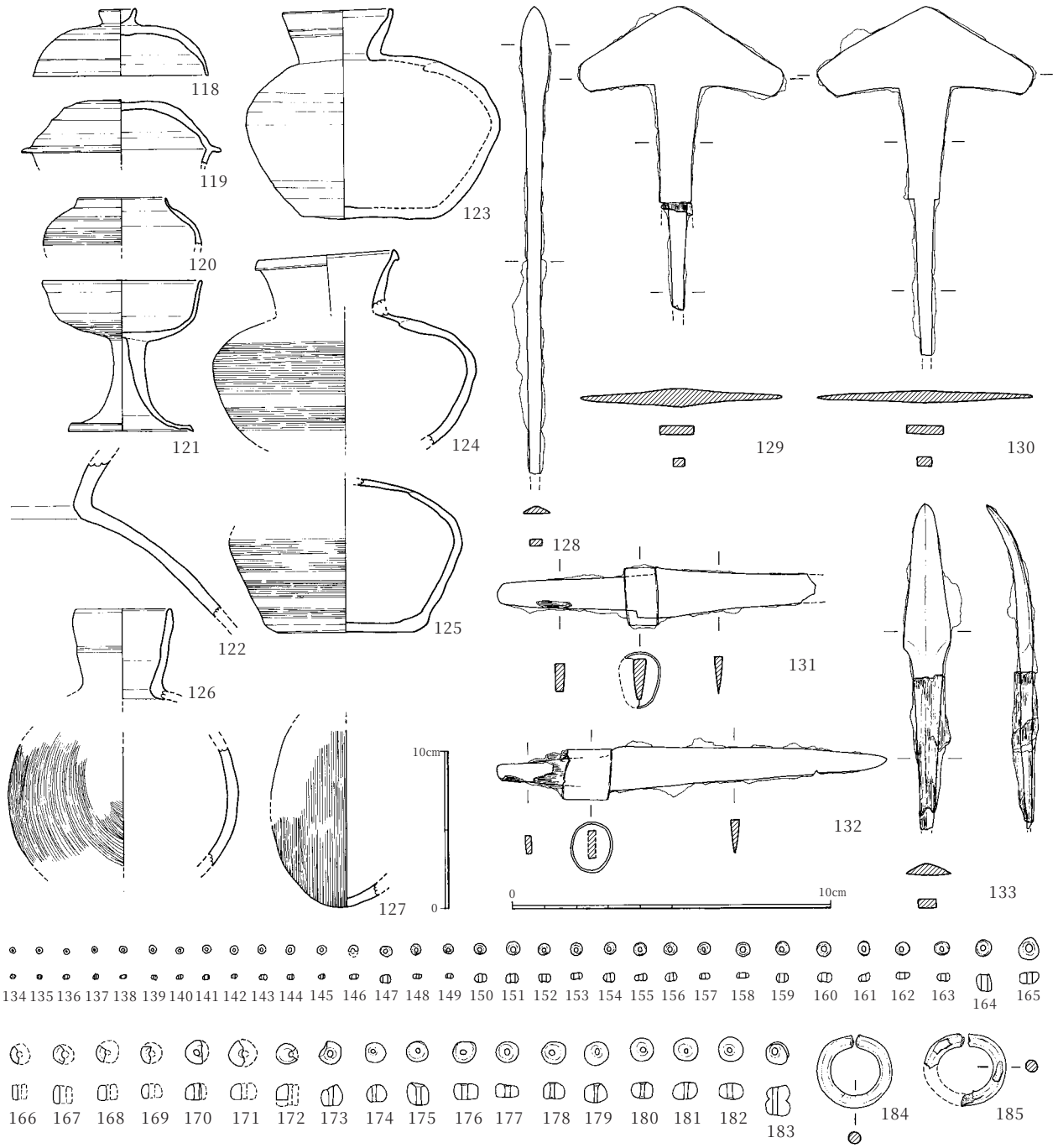


図86　A-1号墳出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）

平　瓶（123～125）

123は完形品で、口径7.0cm、胴部最大径16.2cm、底径8.3cmを測る。底部は平底である。頸部には２条の浅い沈線が巡る。124は頸部と胴部が接合しないが、同一個体と考えられる。口径8.6cm、胴部最大径16.6cmに復元される。125は胴部片で、最大径14.6cm、底径9.0cmを測る。底部は平底である。

武　器

鉄　鏃（128～130）

128は長頸柳葉形鉄鏃で、残存長15.7cm、鏃身長2.7cm、厚0.3cm、幅0.9cmを測る。鏃身は撫関である。129、130は短頸箆被両丸造三角形鉄鏃で、いずれも茎端部が欠損する。129は残存長9.6cm、鏃身長2.5cm、厚0.7cm、幅6.4cm、頸部長3.7cm、幅1.0cmを測る。茎部に矢柄の木質

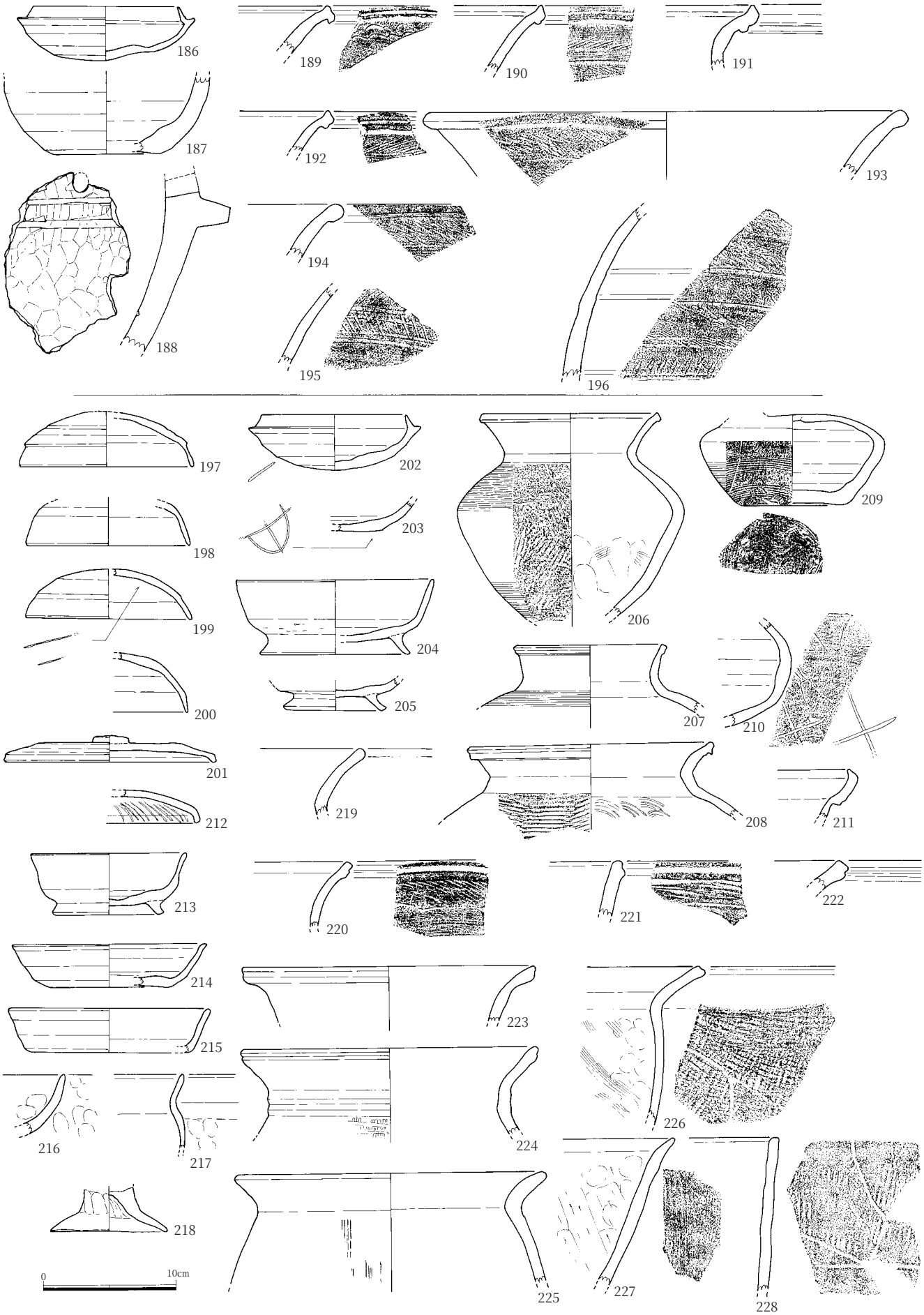


図87　その他の出土遺物実測図（1/4）

が僅かに遺存する。130は残存長11.0cm、鏃身長2.6cm、厚0.4cm、幅6.8cm、頸部長3.5cm、幅1.0cmを測る。

工　具

刀　子（131、132）

131は切先が欠損する。残存長10.1cm、刀身元幅1.6cm、刀身厚0.3cm、茎厚0.3cm、尻幅0.6cmを測る。栗尻で柄縁金具の断面は倒卵形を呈し、長径1.8cmを測る。柄の木質が僅かに遺存する。132は完形品。全長12.3cm、刀身元幅1.4cm、刀身厚0.3cm、茎厚0.2cm、尻幅0.5cmを測る。切先はフクラ、尻はやや変形の栗尻である。柄縁金具は断面が楕円形を呈し、長径1.8cm、短径1.4cmを測る。柄の木質が僅かに遺存する。

鉈（133）

133は茎部が僅かに欠損する。残存長10.2cm、刃部長4.5cm、同幅1.5cm、同厚0.4cmを測る。刃部は緩く湾曲し、中央に鎬がある。茎部には僅かに柄の木質が遺存する。

装身具

ガラス製玉類（134～165）

134～146は粟玉、147～165は小玉である。いずれも引き伸ばし技法で製作されたと考えられる。色調は紺青色を呈する。

土製玉類（166～182）

166～182は小玉で、直径0.6～0.8cmの不整形な円形を呈する。182は連玉で直径0.7cm、高さ1.0cmを測る。色調はいずれも消炭色を呈する。

耳　環（184、185）

184は銅芯金張製で、短径2.3cm、長径2.4cm、内短径1.45cm、内長径1.6cm、環断面径0.4cmを測る。185は同じく銅芯金製で、同一個体と考えられるが大きく破損している。短径2.2cm、長径2.6cm程度と推定される。

第4章　小　結

本書で報告した古墳群は、いずれも大きく破壊され、その構造等が不明な点が多い。紙面の都合もあり、簡単にその特徴に触れ、小結に代える。

石ヶ元2号墳は、墳径が22mに復元され、群内で最大規模である。また石室は、玄室長約３m、幅約1.8mを測り、玄室の奥壁側に屍床を持つなどの特徴をもつ。元岡・桑原遺跡群で確認された、この屍床を持つ石室を有する古墳は、現在のところ石ヶ元2号墳と12号墳のみである。12号墳は、墳丘規模が直径14mと小型の円墳であるが、石室の規模は、玄室長約2.7m、幅1.8m以上と大きい。また、副葬品の内容も豊富で、とりわけ鍛冶工具一式や鉄地金銅張の馬具、太刀３振など被葬者に鍛冶に関与した有力な階層が想定される。2号墳では、石室の破壊が激しく、目立った副葬品の出土がなかった。被葬者にどのような人々が想起されるか不明であるが、墳丘や石室の規模から、群内の最有力者層が想定される。

石室石材の問題では、元岡遺跡群では、基本的に地元の基盤層をなす花崗岩であるのに対し、3号墳のみは壁体の石材に玄武岩を使用している。玄武岩は、最も近隣では今津湾の南に位置する今山のみで産出され、被葬者や造墓集団の違いによるものか、今後の研究課題として興味深い。

10号墳では、小型の竪穴式石室が検出された。小型の石室を内部主体とする古墳群として、本古墳群の東に位置する元岡古墳群O群がある。元岡古墳群O群は、いずれも追葬可能な横穴式石室で、石ヶ元古墳群でも、13号墳や18号墳などに同様の構造のものが見られる。10号墳は出土遺物がなく築造年代が不明だが、立地状況などから考えて、その周辺で検出された土坑墓群と築造年代にあまり差異がないと推定される。

出土遺物から、土坑墓SX－016の築造年代は7世紀中葉以降と考えられる。周辺では、18次や20次地点など官衙関連遺構が検出されており、一連の土坑墓や小石室墳の被葬者にこれらの下級官人層との関わりが少なからず想定される。

報　告　書　抄　録

ふりがな	もとおかくわばらいせきぐん　しち
書名	元岡・桑原遺跡群　7
副書名	一般県道桜井太郎丸線拡幅に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第910集
編著者名	松浦　一之介
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡市中央区天神1丁目8番1番　　電話　092-711-4667
発行年月日	平成18年(西暦2006年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとおかくわばら 元岡・桑原 いせきぐん 遺跡群 にじゅういちじ 21次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざくわばら 西区大字桑原 あざいしがもと　あざべっしょ 字石ヶ元・字別所			33° 36′ 00″	130° 13′ 23″	2000.04.04 ～ 2000.10.20		道路拡幅

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元岡・桑原遺跡群	墳墓	古墳時代 ～ 近世	古墳 土坑墓 溝	須恵器、土師器、中国製青磁、白磁 朝鮮陶磁器、鉄製武具・工具、馬具 ガラス製玉類、翡翠製玉類	古墳時代後期の円墳群と土坑墓など 大型の横穴式石室に屍床がみられる 花形杏葉など豪華な副葬品など出土

Motooka－Kuwabara Site 7

The Report of The Research of Cultural Properties Fukuoka City Vol 910
31 March, 2006
Fukuoka City Board of Education
Fukuoka City Board of Education
1-8-1 Tenjin Chuo-Ku Fukuoka City, JAPAN

Edited and published by Burial Cultural Properties Section
of Fukuoka City Board of Education
Printed by Koubunsya Printing co.ltd
No parts of this publication can be copied by any means
without prior permission of this copyright owner.

元岡・桑原遺跡群7

福岡市埋蔵文化財報告書第910集

平成18年3月31日
編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
印　刷　弘文社印刷株式会社
福岡市博多区住吉三丁目8番17号

The Report of The Research
of Burial Cultural Properties
Fukuoka City Vol910

Motooka－Kuwabara Site 7

31 March, 2006

Fukuoka City Board of Education